
吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた

【Nコード】

N2973Y

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

皆様、久しぶりにバカテス・ジャンルに復活する暮灘ですm(____)m

本当なら【バカと努力っ娘と四角形】が連載再開出来ればいいんですが、ちよつとそれも不可能な状況…

ですが、ある切っ掛けでバカテス・キャラを書きたいという情熱と、【クロスネタって面白え〜】って思いが出て参りまして、

「いつか書きたい【連載準備的な試供作品】を色々書いて行きたいなあ……」

と思い、勝手ながら今回の企画を立ち上げました。

基本的にはタイトル通りに、

【バカテスの主人公の明久を、色々な作品に組み込み、色々なヒロインと絡ませてみる】

という単純なコンセプトです。

特に制限は無く、本当に試供作品やパイロット版ばかりになると思いますが、読者の皆様にご意見ご感想等を頂ければ嬉しく思うと同時に、今後の連載作品の参考にさせて頂きますm(_____)m

現在の作品

明久 禁書目録の世界：3話（現在、【とあるバカと禁書目録】として連載）

【バカとアリアと賞金稼ぎ】 現在8話

明久& a m p・バカテス・メンバー 緋弾のアリア世界

【バカとトリッパーとガンダム種】 現在3話

明久&バカテスメンバー

（転生）

ガンダムS E E D世界

皆様、こんばんわー

本当に唐突なバカテス・ジャンル復活に恐縮してる暮灘です。

今回お届けする作品は、サブタイ通りに

【明久 禁書目録世界】

というネタで、

明久

世話好き&料理好き

特殊能力 有り

能力性質 非能力&非魔術（現時点では分類不可能）

という設定が基本となります。

また、”受け皿”となる禁書目録世界Ⅱ【学園都市】も、原作より様々な改変が行われています事をご了承くださいm（――）m

一応、1話完結が原作ですが、この【明久 禁書目録世界】シリーズは、ダイジェストっぽい書き方にはなっていますが、現時点で【禁書目録編（原作1巻）】まではプロットが存在します。

こんなコンセプトの作品ですが、お楽しみいただければ幸いです
o ^ - ' () b

ねえ、みんな…

【学園都市】って知ってるよね？

ぶっちゃけ、僕が住んでる街ことなんだけどね

じゃあ、この街が出来た由来や経緯はどう？

へえ…みんなが知ってる【学園都市】ってかなり物騒なんだね？
えっ？

”お前の世界”は違うのかって？

うん。大分、違う…と思う。

そもそも、僕の住んでる【学園都市】が設立された目的は、

《最先端の科学と古代からの英知である魔法の積極的な融合を研究
すること》

なんだ。

そして、僕が生まれる何年前…【学園都市】は、その”最初の存
在意義”ファースト・レゾンデートルを示す事に成功した。

”シェリー・クロムウェル”

”エリス・マツカートニー”

多分、【学園都市】でこの二人の名前を知らない人はいない。

僕が生まれる何年前になるから……20年くらい前かな？

【学園都市】で行われた実験で、シェリーさんは「始めて超能力を使った魔術師」になったし、エリスさんは「始めて魔術を使った能力者」になったんだ。

ある意味、それまで良くて色物、悪くて異端扱いだった学園都市の真価が世間に認知され始めたのは、それからだったのかもしれないね？

えっ？ 二人とも生きてるのかって？

……どうして、そんな質問するのか分からないけど、今も二人とも学園都市で【魔法と能力の近似性と相違】って感じの研究を、二人揃って大学教授になった今でも続けてるよ？

僕もシェリー先生やエリス先生主催のセミナーや講演会によくいき、すっかり大学のオープン・キャンパスのゼミに登録してるしねっ

なんでって？

うーん：細かく言つと長くなるから、簡単にはしよるけど、僕の【
両腕に宿る”力”】：

ゼロ・スコア
【零点回帰】

って言うんだけど、この力がまだ能力なのか魔術的な何かなのかハ
ッキリしないんだよ。

こついうケースってごく希あるらしくて、隣の部屋に歳上の彼女と
一緒に住んでる当麻：彼女とラヴラヴ同棲中の上条当麻の右手に宿
る【幻想殺し（イマジン・ブレイカー）】も似たような区分らしい
からなあ。

（僕のゼロ・スコアと当麻のイマジン・ブレイカーって性質も似て
るよね…）

ただ、専門家に言わせると似ていて非なる物：結果が似てるだけで、
原理は全く別らしい。

（当麻は文字通りブレイカーに近い性質で、僕はキャンセラーに近
い性質かあ…）

まあ、それはそのうち詳しくね？

某年7月20日

全ての始まりの日…

act - 1

” 腹ペコシスターがやって来た！！ ”

僕は今のところ魔術でも能力でもない【力】を除けば、かなり普通な人間だと思う。

ああ、そう言えば自己紹介がまだだったっけ？

僕は【吉井明久】。

とある高校に通う一年生だよ

能力は前に書いたけど、未分類の【ゼロ・スコア零点回帰】。
レベルは、当然のように「Unknown」。

そりゃあ、魔術でもない能力にも該当しない力で、”物差し”が作れない以上、レベルが不明なのはしょうがないよね？

友達が変わり者が多いし、魔術でも能力でもない力のせいで色々な所から呼び出されるけど、でもそれ以外は特に幸福でも不幸でもない…と思う。

だから、”不測の事態”ってあんまり慣れていないんだよ。

だから、ある晴れた休日、お布団を干そうとベランダに出たら、何故かもう布団が干されてて、その布団をよく見たら…何となくウェツジウッドとかの白磁の”ティーカップに似た印象”の真っ白の修道服着たちみっこいシスターさんで、なおかつ…

「お腹へった…」

なんて、ベランダに引っ掛かってる白くてちみっこいシスターさんに呟かれる経験に遭遇するのは初めてでありましたとさ…（汗）

「お腹減ったって言うてるんだよ？」

何故か疑問形のその可愛らしいシスターさんに僕は、

「それは僕に何か喰わせると要求してるって解釈していいのかな？」

「うん 理解が早くて助かるよ」

∴

∴

∴

∴

∴ まあ、いつか。

「手っ取り早く食べれる物と、美味しく食べれる物、どっちがいい？」

するとちみっこいシスターは、本当に満面の笑顔で、

「手っ取り早く食べて美味しい物がいい!!」

寧ろ清々しくなるくらいキツパリと言い切りましたとき。

「うゝん…なるべくリクエストには答えられるように努力はするよ。でも、その前に…」

僕はシスターさんの両方の脇の下に手を入れて…

” ふわっ ”

(うわぁ…軽い)

「にやにやにや!?!」

僕に抱き上げられたせいなのか、シスターさんは顔を真っ赤にして

猫みたいな声を上げるけど、

「ベランダにぶら下がったまんまじゃ、ご飯は食べられないでしょ？ 可愛いシスターさん」

「はう…」

あれ？ 何だか大人しくなっちゃったよ。

act - 2

” 禁書目録にDedicator…ねえ ”

「シスターさん、炒飯と焼きそばどっちがいい？ って言うか炒飯と焼きそばってわかる？」

すると借りてきた猫みたいにチヨコンと座るちみっこいシスターさんは、

「どっちもわかるよ」 それに両方！」

「炭水化物と炭水化物の夢のコラボレーションになっちゃうけど？」

「そのコラボ、むしろ上等なんだよ えっと、それと私の事は【インデックス】って呼んで欲しいんだよ」

（「インデックス」：コードネームかな？）

僕は中華鍋にゴマ油を流して、溶き卵を入れながら…

「それって、索引ちゃんとか、見出しちゃんって意味かな？」

「うっん。【禁書目録】って意味なんだけど…あつ、魔法名は【Dedicatus545】、”献身的な子羊は強者の知識を守る”って意味だね」

えっ？

それって…

「【禁書目録】って、もしかして【Index Librorum Prohibitorum】のこと？ 1564年にローマ十字正教の教皇によって制定されて、1966年に廃止されるまで存在していたっていう【反十字教書物のブラックリスト】って感じの…」

するとシスター、”インデックス”は少し驚いた顔で、

「君、随分詳しいんだねえ…」

僕は”自分の力の根源”が知りたくて、能力関係と一緒に魔術関係の本とか読み漁ってるから、歴史とかラテン語とかその流れで詳しくなっただよ。

まあ、そっちに時間を取られてるせいで普通の勉強はからっきし、まさに【バカまっしぐら】だけどね（笑）

それはともかく、

「それで、”Dedicated”って…僕のラテン語知識が確かなら、【神に完全に捧げる事を宣言する】って意味になるんじゃないかな？」

「君、ラテン語までわかるの？ 若く見えるけど、君は学者さんとかかな？」

「ラテン語は、かじった程度だけどね。あつ、僕は明久。吉井明久。学者どころか、どちらかと言えばデキの悪い方の学生だよ」

シェリー先生やエリス先生に言わせれば、魔法や魔術を理解するには、過去へ過去へ遡り、それが成立した経緯まで理解しないと本当には理解できない…らしいから、僕もそうしてるって訳。

シェリー先生に言わせれば、

『科学は未来へ未来へ進む学問だけどね、魔法や魔術は時間の積み重ねで成立する。時間のベクトルが真逆なんだよ』

って事らしい。

まあ、そういうシェリー先生も、ルーンの解析にコンピュータ使ったり、ゴーレム錬成の術式を刻むのにチョークだけじゃなくてハンディ・レーザー使ったりするけどね

「アキヒサ…アキヒサだね」

なんか嬉しそうなインデックスだけど、

「ところで、インデックス…一つ聞いていい？」

「うん　アキヒサは命の恩人だもん！　わたしに答えられる事なら、なんだって答えるよ？」

「じゃあ…」魔法名”を名乗ったって事は、ご飯を作らせた後、僕をサクツって殺っちゃうつもりなのかな？って…」

僕の言葉に、インデックスはいかにも心外って顔で、

「そんなことしないもんっ！！」

act - 3

” 友達がコーヒー豆と一緒にやって来た”

「アキヒサ、天才なんだよっ！！ スツゴくスツゴく美味しいんだ
よっ！！ ここまで美味しいと、きつとお腹好いて無くても美味し
いって思っただよっ！！」

「そ、そっかな？ そこまで喜んで貰えると、照れ臭いけど嬉しい
よ」

あゝもう、口の回りソースだらけじゃん。

「喋りながら食べるから…インデックス、こっち向いて」

僕はティッシュを手にとってインデックスの口の回りを拭いてみる。

「はい。これでよしつと」

するとインデックスは、ちょっぴり頬を赤くして、

「ねえ…アキヒサってもしかして、凄く”世話好きな人”…なのかな？」

「かもね。周囲に何かとほっとけない人が多かったし、今も多いから」

インデックスの皿上の残量が少ない事を確認した僕が立ち上がろうとした時だ。

” あつきひさクウウウーーン ”

「な、何っ！？ 今の不気味な声っ！？」

「ああ、友達が来たみたい。うーん、今のは【音を媒介する空気振動】を”ベクトル操作”した音なんだ。簡単に言えば、指向性スピーカーみたいなものだよ」

チンプンカンプンな顔をするインデックスに、僕は「ちょっと待ってて」と言い残し、席を立って玄關に向かう。

そして、ガチャとドアを開けると、立っていた無造作に切り揃えた長めの白髪頭で、ヒョロっとした印象の”友達”に、

「やつほ、”いっぱー”。今日はどうしたの？」

「コーヒー煎れてくれ」

と、” いっぱー”…通称【アクセラレーター一方通行】は、玄関に入るなり、僕にビール袋に入った紙袋を手渡す。
開けて見ると、

「コーヒー豆？ 店で挽いてもらわなかったの？」

「店で挽かせたら、持っていくまでに薫りが飛ぶだ口オ。それに明久が挽いた方が美味エンだよ」

いっぱいのコーヒーへの拘りは半端じゃないからなあ。

「ん、わかったよ なら、いっぱいの期待に応えないとね。あつ、いつまでも玄関に居ないで上がりなよ？ あつ、お客さん来てるけど、同席でいい？」

いっぱい…強面こわおもてだけど、意外と人見知りだからなあ。
一応、断っておかないと。

「客だア？ 俺の知ってる奴かア？」

僕は首を左右に振り、

「多分、誰も知らないと思う。多分、英国清教系のちみっこいシスターで、ベランダに引っ掛かってた」

「アアン？」

いっぽーは思い切り怪訝な顔をするけど、事実だしなあ…

僕といっぽーは家に入りながら、

「あれ？　そういえば、”あいちゃん”に”うみちゃん”は？　—
緒じゃないの？」

「ああ。最愛と海鳥は”バイト”だ」

「バイト？　ああ、【アイテム】かあ。沈利さんのところなら、まあ大丈夫かな？　最近は危ない橋を渡ってないって噂だし」

沈利さんって言うのは、フルネームを【むぎのしづ麦野沈利】さんって言うって特殊能力者部隊【アイテム】のリーダーさん。

熊もびつくりなぐらい鮭料理が大好きで、最近はゴッツい彼氏ができたらしいって噂があるんだよね〜

アイテムには僕の友達も所属してるから…

（この間、差し入れに鮭弁を作って持っていったら、大喜びされたっけ）

…危うく【アイテム専属料理人】にされかけたけど（汗）

「ンで、妹どもと合流するまでの時間潰しに来たんだがヨォ…タイ

「ミング悪かったか？」

「ううん。いっぽーならいつでも大歓迎だよ」

「…明久のそばにやたら人が集まるワケ、解る気がするぜ…」

いっぽーは何か呟いたけど、音声を拡散させたのかよく聞こえ無かった。

皆様、ご愛読ありがとうございますm(____)m

何というか…すみません！(____)

勢い任せでやっちゃいましたっ！！

脳内動画が止まりませんでした(____)

なんせ、頭の中のインデックスが、まるで中の人が乗り移ったように出たい出たいうるさくて(笑)

そして、アイデアを纏めてたら、いつの間にか作品が完成してた罫(____)

今回は、取り敢えずの試供作品という事でしたが、皆様いかがだったでしょうか？

面白い面白くないでも構いませんので、ご意見ご感想を頂ければ幸いですm(____)m

皆様、こんにちわー

いつも心象風景は魔女っぽい暮灘です（^^；

なんと、勢い任せで書いてしまいました【バカ目録】クロスの第2話（^^；

というか、インデックスは可愛いし、明久&一方通行の友情シーンが好きすぎて、書かないのが辛い（笑）

今回のエピソードでは、一方通行と明久の過去や丸くなった根本的な理由、そして【この世界の学園都市】と魔法と科学の概要が、かなり明かされます。

この、【バカ目録】クロス・シリーズの一方通行は、（作者的にはいい意味で）とても【らしくない】です。

何故、彼が絹旗最愛や黑夜海鳥を救い養うような”丸い人間”…【口は荒いけど、基本的に腕っぷしの強い善人】になったのか？

という理由が、何となくでも皆様に伝わればなあと（^^；

明久との友情の根本と、ラストのインデックスに贈った言葉：

これが、【この世界の一方通行の本質】だと暮灘は考えてます

こんなエピソードですが、皆様が楽しんで頂ければ幸いです（o^
,）b

とある学生寮として使われてるマンション

明久の家、キッチン

「ねえ、いっぱー…」

何かいいお茶菓子ないかな？という感じで台所を漁っていた明久の問いかけに、

「アアン？」

「インデックスと一緒にリビングで待ってたら？」

するといっぱーこと、アクセラレーター一方通行は苦虫を噛み潰したような顔で、

「明久クウウン…この俺にあの時代錯誤臭いミニサイズのシスターと、何話せてんだア？」

「英国十字清教の歴史概論とかは？ ローマ十字正教からの政治的独立を画策した【宗教改革という名前の独立戦争】のくだりとか面白いよ？ 後のアメリカ独立戦争の時の近似点とかね」

「興味ねエ…それよりも俺は煎れたての一切薫りが飛んでねエ、香ばしいコーヒーが飲めてエンだよ」

明久は苦笑しながら、

「はいはい。もうすぐ抽出し終わるから、もうすぐ待ってね」

「オウ…」

と、何気に横目でコーヒー・サイフォンをガン見してる、わりと子供っぽい一方通行であつた。

「お茶受けは、買い置きのコツキーしか無いけど良い？」

二人分の紅茶とクツキーを入れた菓子皿を持ってリビングに戻ってきた明久がそう言つと、

「うんっ！ アキヒサ、何から何までありがとうなんだよ」

「別にいいよ。客人をもてなすのは、古式豊かしい日本の風習と美德だし」

「だが、オメエは度が過ぎンぜ？ 一歩間違つと、襲撃してきたスキルアウトまで茶と菓子出して持て成しそつだからなア」

と、呆れるような表情でリビングへ入って来るのは、すっかり本日二杯目の”明久コーヒー（笑）”を、なみなみと大きめのマグカップ（明久の家に置きっぱなしの私物）に注いでキープしてる一方通行だった。

「それでもいいじゃない？ お茶とお菓子で殺し合いが話し合いに変わるなら、僕は喜んでいくらでも用意するよ」

しかし、一方通行は面白くなさそうに、

「ケツ！ 明久、オメエは連中は甘過ぎるぜ？ 情けってんのは、常に正しい結果になるとは限らねェんだぞ」

「わかってるよ。見逃したが為に、逃した相手に後ろから頭を撃ち抜かれる事もある…それが、【学園都市】の宿命だからね…でも、」

明久は小さく笑い、

「いっぽー、心配ありがとう」

「チツ…」

「でも、これも性分だからね」

少しだけ、【この世界の学園都市】を補足させて欲しい。

”とある平行世界”では、

【スキルアウトⅡレベル0】

が常識だったが、この世界の学園都市は、そうとも限らない。

前にも触れたが、学園都市の存在意義は、

【最先端科学と伝統ある魔術の有機的融合】

それを看板に掲げてる街が、”能力者じゃない”という理由で、人を放り出す訳は無かった。

レベル0はあくまで【能力者基準】の話で、今の学園都市の技術なら、本格的な能力開発（脳の外科的処置による構造変更）の前に、

いくらでも判定ができる。

魔術師の素質というのは能力者よりかなりアナログ的で、資質があるかどうかは本当に修行をやってみないとわからない部分がある。

そして現実レベル0と判定された人間が、後に魔術師として大成したというケースは、プロパガンダではなく学園都市には純然たる【事実】として山積している。

考えてもみて欲しいのだが、原作と呼ばれる”とある平行世界の彼女”に言わせれば…

『魔術っていうのはね、才能の無い人間（無能力者）が、それでも才能のある人間（能力者）と同じ事がしたいからって編み出された物なんだよ』

であるならば、【無能力者】とは判定された人間が無能と呼ばれたくないが為に魔術にすぎるのは、当然の帰結であった。

更に学園都市では【最初の超能力を使った魔術師】であるシェリー・クロムウェルや、【最初の魔術を使った能力者】であるエリス・マツカートニーの成功を受け、コンピュータを中核に据えた最新機材を積極的かつ大量に導入し、更に多角的&高速に大量の情報を元に魔術を解析し、数多くの成果を上げていた。

でも、皆様は不思議に思わないだろうか？

とある平行世界において能力者と魔術師が互いの力を使えない理由は、脳の構造的な違いをあげ、

【直流回路に交流の電気を流す、あるいは交流の回路に直流の電気を流すような物】

と表現されていたが、この意味は…

【電気（異能の力）と言う本質は同じだが、交流と直流のように能力と魔術には性質の違いがあり、それぞれに対応した（脳内）回路でないと焼き切れてしまう】

という比喻だ。

しかし、我々は日常的に変換回路を用いて交流と直流を切り替えて使っている。

ならば…

学園都市の一番偉い人

『ならば、我々も魔術と能力の間の脳内信号処理を切り換える…そのような交換器を開発すれば良いだけの話だ』

必要悪の教会の偉い人

『グッドアイデアにありにけりですことよ』

と、このような話し合いが持たれ、シェリーとエリスの成功を持つ

て結果となった。

このような経緯から今や学園都市は、能力者だけでなく、

【世界で一番魔術の研究を大っぴらにやり、また強さを考慮しなければ世界有数の魔術師が多く住んでる街】

という側面も持つ。

【学園都市】は、名前負けしないよう研究と教育には熱心な街で、魔術の研究と教育、魔術師の育成もまた例外ではない。

科学サイドから無能力者（レベル0）と判定された人間の受け皿と
かる【魔術】。

では、そこから落ちぶれた人間の行き先は？

実は、社会的セフティ・ネットは学園都市にはもう一枚存在する。

それ即ち【信仰】…平たく言えば、【英国十字清教】だ。

建前的には、魔術関連の技術やパテントは全て英国十字清教…実質

的には必要悪の教会が掌握ネセサリーウス＆管理していて、そうであるが故、形の上だけでも主流の英国式近代魔術師を志す者は、十字清教に改宗ないし入信しなければならない。

そして、魔術師になりきれなかった者の中には、信仰に救済を見出す者も多く、その中から聖職者を目指す者も数多くいる。

実を言えば学園都市というのは、極東で英国十字清教徒がもつとも密集してる街で、同時に英国十字清教のアジア最大の拠点でもあった。

これが後に英国十字清教保守派…魔法と科学の融合に反対する一派（彼らの妨害が懸念された事が、シェリーやエリスの実験が学園都市で行われた理由の一つ）が、迂濶に学園都市を攻撃できない理由であり、同時に後々ローマ十字正教が執拗に狙ってくる理由の一つでもあるのだが…

とにかく…能力、魔術、信仰という受け皿を越えてなお【無能力者狩り】等となる者がどれ程いるのか？という事だ。
スキルアウト【無法者】

例えば…であるが、もし仮に能力者の一部が【無能力者狩り】等という愚かなゲームを始めれば、被害者はまず十字清教系の施設に駆

け込むだろうし、さすれば魔術師が動く。

【この世界の学園都市】とは、そういう力学バランスで成り立っていた。

「ねえねえ、アキヒサ　そのプラチナ・ブロンドの人ってアキヒサのお友達？」

クッキーを頬張りながら、幸せそうな顔で聞くインデックスに明久は頷き、

「うん。そうだよインデックス。行方^{なめかた・いっぽう}一方。僕の幼馴染で親友だよ」

すると一方通行は、少し視線を逸らし…

「よせよ…俺は、もう戸籍も無けりゃ、オマエの言う名前もどこにも残ってねエよ…過去の記憶も曖昧だ」

「でも、いっぽーはいっぽーだよ。例え、記憶が有ろうと無かろうと、ね？」

無垢に微笑む明久に、

「毎度思っただがよ…明久、なんでオメエはそう自信満々にあっさり言い切れるんだア？」

「だっていっぽー、再会した時、ちゃんと僕のこと憶えてたじゃない？」

「ありゃ…どっかで見たことあるツラだって思っただけだ」

明久はクスツと笑い。

「それで十分だよ　それって、ココでは忘れても…」

明久は自分のコメカミをトントンと人差し指で叩いた後、今度を自分の胸を親指で指して、

「ココではしっかり憶えてたって事でしょ？」

一方通行は、白髪をクシャと掻き（一方通行の照れた時の仕草だ）、

「バカが…」

と、小さく呟いた。

「やっぱり、いっぱいはいっぱいだよ　僕をバカって言う時の口調、昔とちつとも変わってないもん。昔からいっぱいには沢山バカって言われてたから、よく憶えてるよ」

「それはオメエがあんましお人好しで無茶で無鉄砲だからヨォ…ア
ン？」

一瞬…ほんの刹那の間、朧気な画像が脳裏を掠めた…

明久と再会してからたまに起こるようになった…理論的には有り得ない現象に、一方通行は慣れ初めてはいても軽い驚きを覚えた。

そして明久は優しく微笑み、もう一度…

「ほらね？　やっぱり、いっぱいはいっぱいだよ」

「いいなあ…」

そんな二人を見て、インデックスは心から羨ましそうに呟いた。

「記憶が無くなっても、そうやって大切に想ってくれる友達がいて…記憶を無くしても、大切に想いたい友達がいて…」

今にも泣きそうな顔で微笑むインデックスに、

「インデックス…その言い方ってもしかして、君も…？」

インデックスは小さく頷き、

「うん。私も一年より前の記憶が無いんだよ」

しかし、場が暖かい友情からシリアスな空気になろうとした時、

”キンコーン”

いきなり、タイミングを計ったようなチャイムの音。

「誰だろ？」

明久は良い意味で空気を読まず立ち上がった。
そして、インターフォンをとると、

『あつ、アキ、今大丈夫？』

モニター画面に映ったのは、茶髪をショートカットにし、ヘアピン

がワンポイントの中々可愛らしく、活発そうな少女だった。

「あつ、ミコちゃん」

明久はチラリと一方通行とインデックスを見る。

一方通行はさして興味も無さそうに「いーんじゃね？」って顔をしてるし、インデックスはコクコクと頷いていた。

「うん、オッケーだよ」

明久が玄関に向かっていくのを目で追ってから、一方通行は、

「なア、シスター…」

「なあに？」

「記憶なんざ無くても、わりと人間どうとでもなるし、生きてはいけンぜ」

「…うん」

「それでも足りねェんなら、新しく記憶すりゃいいだけだ。俺から言えンのは、それぐれェだ」

インデックスは意外そうな顔をしてから満面の微笑みで、

「ありがとうだよ」　　「いっぽー」

「チッ…」

（俺もヤキが回っちまっか…）

あるいは、

（それとも、明久のバカでも感染したか？）

何れにせよ…

「まア…悪イ気分じゃねエな」

<バカテス×禁書目録：試供版1>; 第2話「バカと友情と記憶喪

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

今回は、明久と一方通行の友情と学園都市の本質に焦点を当ててみました、如何だったでしょうか？

もし、よろしければこのまま原作第1巻の【禁書目録編】を、このシリーズで書いてしまいたいのですが、どうでしょうか？(汗)

次回は、ラストに登場した【ミコちゃん】がかなり愉快的行動(笑)をとってくれる予定です(;^_^A

それでは、また皆様にお会いできる事を祈りつつm(____)m

皆様、こんばんわー

本日も時間がギリギリですが、何とか二本アップが間に合いそうでホッとしてる暮灘です（^^）；

さて、ちょっと急ぎ足ですが今回のエピソードは…

【御坂美琴ちゃんが名実共にメイン・ヒロイン】

の回です（o^_^）b

【バカ禁書】世界における彼女の姿や、今の明久への想い、明久とのちょっと過去なんかを散りばめてみました（；^ー^A

ぶっちゃけ、【可愛い美琴】を書きたいが為に作ったようなエピソードです（笑）

皆様に、暮灘の書く美琴が可愛いと思って貰えれば、嬉しいなっ

他にも、原作（小説）をご存知の方には【アイテムの中にいる明久の知り合い】が誰なのかわかったり、あるいは【魔術が使える能力者&能力が使える魔術師】に対するちょっとしたエピソードも出てきます

あと、個人的に気に入ってるのは…

美琴の回想シーンに出てくる佐天と初春がいい味だしてます（o^

、）b

こんなエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです（o^、）

b

追伸

仮にですが…

この【バカ禁書】を連載にして欲しいという読者様はいらっしゃいますか？

また、連載するとしたらバカテス板or禁書板、どちらが適切でしょうか？

さて、明久が玄関を開けると立っていたのは…

茶色の髪を清潔感溢れるショートに纏め、違う学校の後輩に貰った花飾りのついたヘアピンがワンポイントを演出する、中々に可愛い少女だった。

「こんにちわ、ミコちゃん　今日はどうしたの？」

「あ、アキ！　あ、あの…これっ！」

顔を赤らめながら差し出したのは、さほど大きくない、でもお洒落なデザインの紙箱だった。

中から微かに甘い匂いのするそれは…

「あ、あのね！　さ、最近、日本じゃ【学舎の園】にしか出店していない海外の有名なスイーツ・ショップができたのっ！　と、友達と一緒に食べに行ったんだけど、思ったより美味しくて…その、アキにも食べさせてあげたいなって…」

「そっか」

明久は”スッ”と手を伸ばして、

「わざわざありがとうね」

”サラサラ”

柔らかい髪を乱さないように、優しく優しく撫でた。

「ふにゃあ〜」

明久のどこか女の子を思わせる柔らかい笑顔と、暖かさが伝わってくる手の平の気持ち良さに、少女は腰から砕けてその場に座り込みそうになるけど…

（だ、ダメ！ 今崩れたら、ケーキがグシャツってなっちゃう！）

自らの”能力”を使い、生体電流を調整して筋肉に渴を入れて姿勢を維持、ケーキを死守したショートカットの少女は賞賛してもいい。

「あのさ…アキ、上がっていいかな？」

明久はニコリと微笑み、

「もちろんだよ お客さん来てるから、ミコちゃんが良ければだけど」

「”お客さん”…？」

”ぴくっ”

その途端に、少女の気配が変わる…
ただし、明久は気付いてないが（笑）

「是非とも上がらせて貰うわね？」

引き吊りを抑えて無理矢理の笑顔だから、何やら表情に変な凄みがあるが、明久は大して気にした様子もなく、

「うん。じゃあ、先にリビングに行っててくれる？ せっかくミコちゃんがケーキ持ってきてくれたし、お茶のお代わり持つてくから」

「よろしくネ」

ミコ（？） side -

（今度は、どんな女が来てるのよ…！？）

既に来慣れた（ここ重要よ！）リビングに向かいながら、私はま

だ見ぬ”恋敵^{てき}”の事を考えていた。

（この間は、オカッパ頭のピンク・ジャージだったわね…）

そう、この間明久の部屋で鉢合わせたのは、下半身はジャージだったけど、上半身は半裸（というかブラ一枚で、そのブラすら外そうとしてたのっ！）、私より少し歳上な感じの、

（黒髪でオカッパ頭の女だったわね…アキは”リコちゃん”って呼んでたっけ…）

とにかく、そんなのと鉢合わせしたのよっ！

アキが女の子を性的な意味で食べ散らかすタイプじゃないのは、百も承知してるから…

（だったら、私がまだ処女とか有り得ないもん！アキと一番親しい女の子って絶対に私だしっ！！）

あれ？

今、『そう思ってる女の子は一人じゃない』って声が聞こえたような気がするけど、気のせいよね？

と、ともかくアキに話を聞いたら、そのリコって女は能力を極限まで高めて使用する際、【残量能力中毒を起こす特殊な結晶】を服用しなくちゃいけないから、定期的にアキの【零点^{ゼロ・スコア}回歸】で、”浄解”する必要があるんだって。

アキの説明に一切の嘘の匂いや疑わしいところはなかった（当たり前よね？ アキなんだから）んだけど…

『ねえ…ブラ、外す必要あるの？』

アキがお茶を煎れに行った隙に、私が女の直感で訊ねてみると…

『あきひさが望むなら、わたしは貴女が見てる前ではんつを脱いでも構わないけど？』

と、いけしゃあしゃあと言い切りやがったのよっ！！

その瞬間、私は確信したわよっ！！

（ああ、コイツは”恋敵”^{てき}だってねっ！！）

更に加えて…私の胸を見ながら、言うに事欠いて…

『勝った…コホン。そんなチツパイを、わたしは応援しなくてもない』

ですってえ〜っ！！

もし、アキがお茶を持ってくるのがあと少し遅ければ、私はあの時に、掴み合いのケンカになってたかもしれないわ…！！

（しかも帰り際にアイツう〜っ！！）

『アンタの顔、覚えたから…』

『わたしもアナタの”AIM拡散力場”は記憶した』

(アレって、宣戦布告って受け取って良いわよねっ!?)

えっ?

ところで、お前は何者かって?

あっ、そっいえばまだ自己紹介してなかったっけ?

私は”美^{みこと}琴”。
”御坂^{みさか・みこと}美琴”。

よろしくね

一応、学園都市に7人しかいない【レベル5の能力者】って事にな
ってるわ。

二つ名は、”超^{レールガン}電磁砲”よ

（まあ、私としては【ちょびつとだけ魔術が使える”魔法少女”】
って方が気に入ってるけどね）

シェリー・クロムウェルやエリス・マツカートニーが先鞭を付けた
みたいに、今時の能力者は、魔術が使える者もいるのよ？

”魔法が使える能力者”、もしくは”能力が使える魔術師”…通称
【バイア（両力使い）】って呼ばれてるわね？

私も一応は、その【バイア】なのよ

あつ、人間の脳の処理能力は限度があるから、使える魔法はたった
一つだけだけだね。

まあ、簡単に言っちゃうと…

高レベル能力者って、脳が無意識に能力に演算を降っちゃうから、
そんなに大量に魔法は使えないの。

実際、【バイア】として最もバランスがいいのは、”レベル3ぐら
いの能力者”とされてるわ。

能力と魔術が両方ともそこそこ使えて…

模擬戦とかで戦ったりしても、能力と魔術が互いの欠点を補ったり
してて、人によってはかなり強いわよ？

話がズレちゃったわね？
でも、他に話す事って…

あっ！

一番大事な事を言うのを忘れてたっ！！

私こと御坂美琴は…（あれ？　どうかで聞いたことあるフレーズね？）

アキこと吉井明久に熱愛してるのですっ！！

ちよっ！？

なんでそこで全力全開でズッコケるのよっ！？

えっ？

平行世界のお前は、そんなんじゃないだろう？

私じゃない私の事なんて知った事じゃないわ。

好きな相手に素直になれなくて、ツンデレな態度をとってる？

冗談じゃないわよっ！

アキはタダでさえ鈍感^{バカ}な上に、素直で純粹で無垢で、とんでもなく優しく可愛い^{バカ}のよっ！！？

ツンデレなんかしょう物なら、一発で…

『僕は、ミコちゃんに嫌われちゃったのかな…？』

って思うに決まってるじゃない！

そんな風になったら、ここぞとばかりに横から何者かに掠め盗られるわよ、間違いなくなっ！！

（佐天さん、初春さん…私、頑張るからっ！）

私に好きな人がいることを知って、全面協力してくれる年下の友人二人の顔を、私は思い浮かべる。

『短パンは駄目ですよ。色気無さすぎですし、蹴り技使う時にパンツ見られたくないから…なんてバレたら、普通にドン引きされます』

『でも、私…下着とか子供っぽいとか黒子に言われてるし…』

『それがいいんですよっ！！ 普段は凛々しくてお姉様気質の御坂さんが、実は子供っぽい物が大好きって言うのは、男の人にとっては激しく萌え要素なんですっ！！』

『そ、そうなんだ…』

『そして、思いつきり！ 御坂さんが思い出すと赤面して恥ずかしさのあまり転げ回るくらい思いつきり甘えまくるんですっ！！』

『ほえっ！？』

『可愛い物好きに子供っぽい下着、そして激しく甘えん坊…これにギャップ萌えしない男はいませんっ！！』

『そ、そうなのかな…？ でも、私…散々ケンカ売っちゃったし…そんな私が甘えても…それに私、本当に甘えん坊だし…』

『御坂さん御坂さん。きつと大丈夫です 御坂さんの売ったケンを残らず買ってくれて、気の済むまで付き合ってくれるようなおバカな…バカみたいに包容力がある男の子なら、きつとどんなに御坂さんが甘えても受け入れてくれる筈ですよ』

『初春さん…』

『これ、差し上げますね』

『これって…お花のついたヘアピン…？』

『わたしが昔使ってたお古ですが、きつと御坂さんの可愛さをアピールするのに役立つってくれる筈です』

『グスッ…二人ともありがとう…っ！！』

『いいんですよ！ 乙女にとって恋バナは重要な栄養素ですから』

『白井さんの事はお任せください。いざとなったらわたしの分まで山ほど仕事を回して、妨害しないように動きを封じますから』

『私、幸せだよ…グス…頼りになる友達が二人もいてくれて…ヒツク…』

『きつと上手くいきますって！　こんなに可愛い人なんですから！』
『いつまでも泣いてたら、可愛い顔が台無しです　ほら、笑ってください』

（佐天さん、初春さん、大成功だよ）

アキは、いともアツサリと私を受け入れてくれた。

【案ずるより生むが易し】って諺は、きつとこういう時の為にあるんじゃないかな？

（明久は、私に優しくしてくれる大事にしてくれる…）

明久の優しさを失ってなるものか…！！

私は、リビングのドアの前で深呼吸を一つ…

（どんな女が出てきても負けないんだからねっ！！）

そして…

私は気合い十分にドアを開けた！

まあ、これが私とインデックスの長い長い付き合いの、最初の一歩だったのよ。

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

深夜アップなので、どれ程の読者様が読んでくださるか心配な暮灘です(^^; ;

皆様、【バカ禁書】の美琴は如何だったでしょうか？

実は、美琴は明久を巡る【暫定トリプル・ヒロイン】の一人だった
りします(笑)

もし、続きを書くとして果たしてここに何人入ってくるのやら…(;
| ^ ^ A

ただ、名前は出てきてないですが、トリプル・ヒロインの一人である
ピンク・ジャージの娘は、間違いなく浜面くんとくつつくより危
険度低いです(o^_^')b

なんせ明久はいざとなれば、鮭弁で麦野を懐柔できますし(笑)

正直、かなり話が固まってきた、そんな長くない連載ならこなせそうな【バカ禁書】ですが…作者、大いに迷ってます（^^；

いや、短期じゃない連載三本は、果たして読者様的にはどうなんだろうと…

さて、色々と悩ましい作品になりましたが、またお会いできる事を祈りつつ（――）

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It・パイロット版・Episode00>

皆様、おはようございまーす

眠れない夜はゝ 取り敢えず小説書こうゝ な暮灘です（^^；

なんと昨晚11時に続き、再び【明久色々ヒロイン】に再投稿ゝ

IBの【Episode00】最終話を含めれば、一日二本更新だぞゝい

いや、徹夜明けでテンション高いんです（^^；

しかも、今回はリクエストの多かった、

b 【明久 緋弾のアリア世界（バカテス×アリア）】ネタ（o^-'-）

いや、【バカ禁書】は美琴を出せてある程度満足してしまったのと、色々と計画が…（汗）

あつ、そうそう！
タイトルは、

【バカとアリアと賞金稼ぎ】

です

今回はアリアの世界と明久達のマッチングを是非是非読者の皆様に聞いてみたかったので…

【浦賀沖海難事故】

を題材に、本編が始まる前のエピソード…

>パイロット版：Episode 00<

を描いてみました（；^ー^A

正直、アリアをちゃんと書いたのは初めてで、世界観とかちゃんと描けてるか激しく不安です（^^；

そして、アリアは元々愉快だけど…

ラストにチラッと出てくるあの娘が何だか愉快的事に…（汗）

自分だと完成度のイマイチわからぬ作品で、原作（小説）程度の銃の話は出てきますが…

皆様のご意見ご感想を頂ければ幸いですm（――）m

某年、冬

武偵高校学生寮

1年強襲科【遠山キンジ】私室前

「おい…キンジ、いつまでもヒッキーしてないで出てきなつて」

「キンちゃん！ もう何日もご飯食べてないよね？ お願いだから、ドアを開けてっ！」

”僕”は、となりの日本人らしい美しく長い黒髪に白いリボンを、世間一般的な基準なら明らかにナイスバディな美少女を横目で見ながら、

（僕はともかく、白雪の声にも反応しないなんて…）

「重症だね…」

僕より遥かに懸命な白雪を見ると、やっぱり何とかしてあげたくなる。

決して白雪と男と女の関係になることは無かったけど…

（というか、僕はもっと薄くてちっちゃくて平べったいのが好みだ

し…)

引っ込んでるとこは引っ込んでいいけど、出るとこは出てない…
凹凸が無ければ無いだけ、

(好きかな?)

とはいえ白雪とは約1年間、武偵高校の【超能力捜査研究科(SS
R:S研)】で同じ釜の飯を食った友人。

(それにキンジとも散々遊んだしね…)

友情が無いと言えは嘘になる。

(しょうがないなあ…)

備品や設備を壊すのは気が引けるけど、

「少し荒療治が必要みたいだね?」

僕は、首の後ろ…正確にはシャツと制服の上着の間に手をつっ込み、

「白雪、下がってて」

背骨にそうように隠し持っていた、”ソレ”を引き抜いた。

「あ、アキちゃん! ショットガン(散弾銃)なんてどつするのっ
!?!」

そう、僕が引き抜いたのは、イタリア・ベネリ社の”軍用”シヨツトガン、【M3T】^{タクティカル}というモデルのカスタムだ。

バレル（銃身）の下に平行にくつつくチューブ・マガジンの装弾数を8発 7発に減らし、その分バレルとチューブ・マガジンを”ソウド・オフ（切り詰め）”し、また散弾銃では一般的なライフル・ストックではなくピストル・グリップにし、はなっからシヨルダー・ストックはオミットした…

簡単に言えば、遠距離での命中率や集弾性、弾数を犠牲にコンパクト化して、携行性と隠蔽性を最大限に引き上げ、近距離制圧銃撃戦に特化したカスタム・シヨツトガンだ。

他にも【ピカンティニー・レール（オプションを取り付けるアタツチメント）】をバレルの左右上面や銃本体上面に増設してるけどね。

「白雪、本来の警察機構のシヨツトガンの正しい使い方って知ってる？」

「へっ？」

唐突な質問にキョトンとする白雪に、僕はニッコリ笑いながらドアノブに図太い銃口を向けて、

「人に向けて撃つんじゃないで、部屋や家に鍵かけて籠城する犯人に対して突入する際、回りの木枠やドアノブごと鍵を吹き飛ばすのに使っただよ。あるいは蝶番とかね」

”バガンツ！”

僕は躊躇なく引金を引く。

ショット・シエル（散弾カートリッジ）から解放された直径約9 m mの鉄球×9発の直撃を受け、極めて日本的な強度で作られたドアノブ周辺は粉々に砕け散る。

ロック部分を失ったドアを、

”ガンツ！”

僕は遠慮なく蹴破った。

部屋に入る時、

”ガシャ”

M3Tのスライド（ポンプ）を操作して、空になったショット・シエルをイジェクト（排莖）すると同時に次弾をローディング（装填）する。

M3シリーズは本来、ポンプ・アクション（今やった手動装填）以外にセミ・オート（半自動装填：1回引金を引くと1発発射される）射撃も可能だけど、僕は片手でショットガンを撃つ必要がある時以外は、僕は装弾不良が起こりにくいポンプ・アクションを使うようにしてるんだ。

滅多に起きないけど、殺し合いやってる真つ最中に銃がジャムって死んだ：なんてなったら、泣くに泣けないからね。

（不確定要素は、消すに限るよ…）

僕はそんな事を頭の片隅で考えながら…

「ちなみに僕はショットガンを蝶番だけじゃなく…」

銃上面にとりつけたマイクロ・レーザーサイトのスイッチを入れて、レーザー・ポインター（レーザーが当たった部分だけ発光する）ではなく見えやすいライン・レーザー（普通の可視光領域のレーザー光線）を選択。

そして、踞ったままの姿勢で驚いた顔で僕を見ているキンジの眉間に合わせる。

当然、レーザー光線はバレルと平行に照射されてる訳だから、M3Tの銃口もキンジのイケメン系顔面に向いてる訳で…

「普通に人の頭にめがけて撃つけどね」

”バガンッ！”

「きゃあっ！？」

後ろで白雪の悲鳴が上がるけど、気にしちゃいけない。

ザクロみたいに弾けたキンジの頭があるなら十字教式の祈りでも捧げるけど…生憎、飛び散ったのは無機物。

キンジの後ろにあったらしいミニコンポだ。

キンジは僕が引金を引く瞬間に横っ飛びして綺麗に受け身。

体に訓練で染み付いたの習性から、愛用のベレッタM92を引き抜き、僕に銃口を向けていた。

「て…テメエ！ 明久っ！！ いきなりなんてことしゃがるっ！！」

少しやつれたし顔色もやや悪いけど、それでも元気に怒鳴りつけてくるキンジ…

”遠山キンジ”に、

「なにって…目覚ましだけど？ どうかの腑抜けた誰かさんの目を覚まさせるには、号砲一発…いや”OOバックシヨット（九粒散弾の一種。鹿撃ち用散弾）”だから9発かな？ ぐらいはいるでしょ？」

「なっ…」

絶句するキンジに、

「だってそうじゃない？ 無責任なネットやマスコミに少々叩かれたくらいで、膝を抱えて部屋の隅で踞まる？ 【リリカルなのは（無印）】のOPじゃあるまいし…そういう姿が似合うのは、僕好みのちっちゃくて可愛くて薄くて、凹凸や起伏の無いペタンコな女の子の特権だよ」

白雪みたいにおっぱいが大きいと膝を抱える時に邪魔だろうし…

”ガタッ”

（んっ？）

部屋の外でなんか物音がしたなあ…

ついでに視界の片隅にピンク色の尻尾みたいなのが見えた気がしたけど、

（まあ、いいや…）

銃声が二発も響いたんだから、事情を知らない人間が見に来ても不思議じゃないし。

「…お前に、一体何が分かるんだよ…」

さっきの力強い怒鳴り声が嘘みたいに力無く呟くキンジだけど…

「分からないよ。最後の最後まで武偵として牙無き人を護り、戦って戦って最後に散ったお兄さんの名誉や誇りを守ろうともせず……」

僕はM3Tをバック・ホルスターに戻しながら、

「一人で悲劇の主人公気取って凹んでる奴の事なんて、さ」

「デメエ……!」

起き上がり様にベレッタを持ってない方の腕で殴りかかってくるキンジだったけど……

「遅いや」

僕は腕を内側から外側に円を描くように回し、キンジの拳を弾くように上に逸らす。

「ハッ!」

そして、強く一步踏み込んでガラ空きの胴体：鳩尾に、踏み込んだ時のエネルギー、八極拳で言う震脚だね　を膝を通じて腰へ伝え、それに上半身の回転運動を相乗させて肘打ちに乗せて放った!

”ズンッ!”

「ぐふっ!?!」

膝から崩れ落ちて、胃から逆流した物を吐いた。

”あの事件”以来まともに食事してないのか、嘔吐したのは胃液ば

かりだったけど。

とある古式武術技の一つ

【半月破】

半月っていうのは肝臓を比喻した言い方なんだ。

本来は相手の腕を跳ね上げガラ空きの”脇腹”、無防備な肝臓に渾身の肘打を叩き込み、それを潰して絶命させる…本当の意味での必殺技だよ。

まあ、寸打や寸掌に並ぶ僕の徒手空拳打撃技の切札かな？

「キンジ…僕に前、自慢のお兄さんの事をよく話してくれたよね？あれって嘘だったの？」

「な…なにを…」

まだダメージが残ってるせいで、絞り出すような声だ。

当然、立ち上がれそうも無いから、僕の方からキンジの前にドスンと胡座をかいて視線を合わせる。

「そうじゃん？ お兄さんが最後まで戦い抜いたって事実より、ネットやマスゴミの方が、キンジにとって重要なんでしょ？」

「そ、それは…」

あゝもう！

「キンジ、アイルランドの古い諺にこんながあるんだ。【泣くな復讐しろ】」

「えっ！？　だけど、俺達は武偵で…」

「最後まで聞いてつてば…それはこう続くんだよ。【最高の復讐と幸せになることだ】…ってね」

「明久…お前…」

「でも、今のまんまじゃ幸せになれない。キンジも…それに白雪も」
キンジは顔をあげ、ようやく白雪も居ることに気付いたみたいだ。

ホント鈍いよねえ…

（事が済んだら、少しお節介するかな？）

僕は立ち上がりながら、キンジに手を伸ばして…

「【武偵憲章第1条】は？」

キンジは、僕の手を強いグリップで握って、

「【仲間を信じ、仲間を助けよ】…か」

なんだ、すっかり覚えてるじゃん。

「キンジのお兄さんだって武偵なら、僕達の仲間じゃん？ だった
ら…」

僕はキンジを引っ張り立たせ、

「信じようよ？ 最後まで武偵であり続けたお兄さんをさ。助けよ
うよ？ 汚されたお兄さんの名誉と誇りを…！」

「ああ…ああっ…！」

やれやれ。

ようやく死んだ目に光が戻ってきたみたいだね

（キンジは、こうでなくっちゃね〜）

「だけど…具体的に、何をどうすればいいんだ…？」

「まあ、任せてよ これでも頼りになる友人はそこそこいるし…」

僕は、つい思い出し笑いをしながら、

「武偵高校ってホントにバカばっかだからさ」

一方その頃、学生寮の片隅では…

「な、な、な…！」

なんかピンク色の髪の毛のちんまいのが、顔を真っ赤にしながら小刻みに震えていて…

「わ、私つてもしかして…アイツのストライク・ゾーンのど真ん中つ…！！？」

何やら妙な事を口走っていた（笑）

更に遠距離射撃場では…

「レキ、いっつも何を聴いてるの？」

「ムツツリー二商会謹製盗聴器…もとい。風の音」

「はあ？ アンタ、今なんかおかしいこと…」

しかし、そのすこしクセツ毛のライム・グリーンの髪を短く揃えた小柄で平たい少女は無表情に、

「気のせい…もしくは禁則事項」

「あつ、そうなんだ…」

そして、周囲に人がいなくなった事を確認すると、相棒のドラゲノフ半自動狙撃ライフルを丁寧にケースにしまい、自分の起伏のない胸をペタペタ…

やがて片手で小さくガッツ・ポーズして、

「…第一関門、突発」

何だか、カオスの予感がする武偵高校の昼下がりであった…

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

暮灘が初めて書いた、【本格的なアリア】ネタは如何だったでしょうか？

何やら明久とキンジの友情物語っぽくなってしまいましたか…

ラストにアリアとレキが持っていたような？

ちなみに…

明久が強すぎるのでは？

理由があります。

S 研所属なのと深い関係があります。

明久がペッタンペッタンロリペッタン好き？

これも理由があります。

シリアスな意味皆無で怜と正反対な娘が好きみたいです（笑）

ま、まあ【バカ禁書】と違って他のバカテス・メンバーもチラチラ出てくるみたいですし、カオスは必至ですが…

もし、皆様のご要望があるなら、少し書いてみていいかなあ〜と思っています。

では、これからもよろしく願いします（――）

皆様、こんばんわー

日付変更前ギリギリアップでホッとしてる暮灘です（^^；

いや、本当は明日アップのがより多くの人に読んで貰えるのはわかってはいるんですが…書き上げたらアップせずにはられないという…

まあ、一種の病気ですね（^^；

読者の皆様的にはどうなのでしょう？

さて、今回は何というか…どっかで見覚えあるキャラが、一杯出てきます（笑）

よろしければ、バカテスとアリアのキャラや世界観のマッチングとかを皆様には是非ともお聞かせ願ひ、今後の作品にの参考にさせていただきますm（――）m

またしても深夜アップなので、どれだけの皆様が読んでくださるか不安ですが…お楽しみ頂ければ幸いです（o^-^）b

部屋から【全身武器庫のような】明久が得意とする、火力を生かした力技…通称”火力技（笑）”で部屋から出てきた遠山キンジ…

明久と白雪に引つ張られるようにして学生寮の食堂に来たキンジを待っていたのは、

「やつほゝ　　やあゝつとアマテラスが天の岩戸からお出ましだねえゝゝ」

と、フリフリのゴスロリ風改造セーラー服にふわふわの金髪、ついでにちびっこできょぬゝな少女が言えば、

「…あまり待たせるな俺も暇じゃない」

かたや白目がちな切れ長の鋭い瞳に、鷹の目を連想させる、小柄ながらいかにも俊敏そうな少年が言葉を繋ぐ。

「理子…土屋…お前ら」

「…明久には【商会】の方で色々借りがある。それだけだ」

土屋と呼ばれた少年に明久は呆れるように、

「毎度思っただけど…僕の女装写真なんか商品価値あるの？」

「…バッチリ。」アシュラ（六武器or六銃使い）の明久”、”イグルー（武器庫）の明久”、”アンデッド（不死身）の明久”…お前の【戦績】^{スコア}にあやかりたいと【強襲科】^{アサルト}を中心に売上好調」

サムズ・アップする少年の言葉を受け継ぐように理子と呼ばれた少女は、「にひひ」と笑い、

「持つてるだけでご利益があるって評判だよ」 曰く”弾が当たらない”。曰く”体力or防御力が上がる”。曰く”死んでも一度だけ復活できる”ってね」

いや、まあ卒業までに3%は病院ではなく墓場送りになる【明日なき学科】の生徒達だけに、それだけ験^{げん}を担ぎたい気持ちもわからないが…

「僕の写真は、RPGのアイテムか何か？（汗）」

「似たようなものだ」

冷淡にすら感じる口調で言い切る土屋に、

「ポートレートが”^{アミューズメント}護符”になるなんて、アキちゃんてば、まるで【幸運の女神様】だねえ」

明久は妙に楽しそうな黒髪少年と金髪少女にため息を突くと、

「康太、程々にね。理子ちゃん、お願いだからアキちゃんは止めて」
後ろで、女装と聞いた途端、キンジが「うう…兄さん…」と涙ぐみ

白雪に慰められてるが、明久は色々な意味で聞こえないようにしてるようだ。

「とにかく…土屋康太、今回の作戦に微力ながら助太刀する」

「同じく、峰理子ちゃん 【探偵科^{インクスタ}】 1年最強カップルが、全力全開でサポートしちゃうよ〜ん」

「…カップル言うな」

「あ〜ん！ コータンってば、い〜つもつれないんだがらあ〜。でも、そういう冷たい言葉責めに理子、ゾクゾクしちゃう」

ギューッと康太の顔を胸の谷間に埋める”前乳固め（フロント・おっぱい・ホールド：FOF）”を極める理子。

しかし、康太は顔色一つ変えない。

どうやら、この世界の康太はかなりの【スケベ責め耐性】の持ち主で、鼻血とは無縁なようだ。

ある意味、チートである（笑）

しかし、見ている明久が何故かどんどん顔が青ざめていく。

「あれ？ あ〜くん、どうしたの？ 物凄く顔色悪いんだけど…？」

明久は理子の台詞に何でもないという風に首を横に振り、

「僕にも色々事情があるというか…その…」

その時、まるでタイミングを測るように、

「おっ？ 明久、遠山を引き釣り出す事に成功したみてえだな？」

「雄二！」

明久は嬉しそうに赤毛の大柄な少年…雄二に駆け寄り、

”カッン！”

と、親友同士の挨拶で、軽く拳を合わせる。

「雄二こそ上手く動員してくれたみたいだね？」

雄二が率いてきた一団を見ながら明久が感心を隠さずに言うと、

「あたばーよ！ ”ダギユラ尋問科”のエース、坂本雄二様をナメんじゃねーぞ？」

雄二はウィンクするが、

「と、言いたいとこだが、今回はあんまし”ネゴシエーション交渉術の余地は無かったな。お前の名前出して作戦内容話したら、大体一発OKだったぜ？ 翔子は勘定に入らねえだろうし」

「うん。雄二とはいつでも一緒」

まるで呼応するように声が聞こえたのは、明久と拳をぶつけた右腕とは反対側の左腕の方から、厳密に言うなら雄二の左腕に胸を押し

付けるように抱き付く、美少女しか入れない特殊捜査研究科（CVR：C研）にいてもおかしくない、日本人形を思わせる長い黒髪の美しい少女だった。

「1年”インフォルマ情報科”、霧島翔子。雄二が明久に力を貸すなら、私も全面協力を約束する」

明久はニツコリ微笑み、

「翔子ちゃんもありがとう」

「いい。理由はさっき言った事が全てだから、お礼はいらない」

しかし、雄二は苦笑しながら、

「いいから礼ぐらい受け取っておけ。なんせ、デートがおじゃんなったちまったんだからな」

「えっ！？ あの…ごめんね？」

「明久が謝る必要はない。雄二の判断は当然だと思う。デートはいつでも出来るけど、仲間を助けるのは今しかできないから…それに、」

翔子は腕に抱きついたまま雄二の顔を見上げてたおやかな微笑みと共に…

「雄二と一緒に居られれば、それだけで私は幸せだから…」

「翔子…」

そして、見つめ合う恋人同士…

「だから、雄二…ずっと一緒に居て…」

雄二は不意にギュッと翔子の華奢な肢からだ体を抱き締め、

「当たり前だろ？ 死が二人を分かつ時まで、ずっと一緒だ…」

「嬉しい…」

自然に重なる唇と唇…

甘い甘いスイート・キス…

今の二人には、

『赤ゴリラ…殺す!』

『今すぐ赤毛を射撃の的にしてえ…!!』

『リア充、比喻でなく爆発させたるか…?』

という周囲の【彼女いない歴〃年齢】のヤローどもの怨嗟の声なんて聞こえる筈もなく、また白雪を筆頭に一部の女子が実に羨ましそうにガン見してた事など、どうでも良い事だった。

(雄二も翔子ちゃんも相変わらずだなあ…と)

なんて明久が考えてると…

「アキ坊!」

明久にとって小さい頃からえらく聞き覚えがある凜とした声が響いて、

「優子さん」

雄二の時とは違う意味で嬉しい顔をする明久に、茶色の髪をショートに切り揃え、エメラルド色の瞳が凜々しく輝く少女は、

「何か用がある時は、レッド・マウンテン・ゴリラなんて珍獣使いに超越さず、直接来なさい！」

「フイ…！」

分厚い胸板に頬擦りしてる幸せそうな翔子を抱き締めながら何か言いたげな雄二を軽くスルーする優子という名の少女。

「じ、ごめん。優子さん…」

途端に姉に怒られた時の弟のように心持ち小さくなる明久に、優子はクスリと微笑むと耳元に唇を寄せて、

「困った事があつたら、いつでも”お姉ちゃん”に相談なさいって言ってるでしょ？」

と、慈愛に溢れた優しい瞳で囁いた。

「うん」

その答えに満足したのか優子は明久から離れると襟元を正し、

「話は、その赤毛拷問ゴリラから聞いたわ…1年”通信科”、木下優子！可愛い弟分の為、一肌脱いであげようじゃないっ…！」

誤解ないように言うておくが、優子は決して雄二を嫌ってはいない。
ただ…たまに呆れ、頭痛を感じるだけだ。

続々と…続々と仲間が集結し始めた。

確かに、明久や雄二の人望は決して無視できない。
だが、それだけではこうまで人材は集まらないだろう。

【仲間を信じ、仲間を助けよ】

いつ果てるか分からない武偵だからこそ、横の繋がりと団結が強く、
またその言葉の意味は重かった…

食堂は今にもミーティングが始められそうな気配…適度な緊張感に満たされつつあった…

そして…

二人の【ある意味、本命の少女】は、すぐそこまで来ていたっ！！

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

武偵高校にちゆかり在籍していたバカテス・キャラクターズや、取り分けキャラ改变やカップリングは如何でしょうか？(^^; ;

正直、アリアは勝手が分からないので試行錯誤しながら書いてるので、自分では面白いのか面白くないのかよくわからなくて(; ^ |
^ A

是非、皆様のご意見ご感想をお聞かせください(_____)

では、また次回があることを期待しつつ(o^_^)(b

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It:パイロット版:Epi sode00>

皆様、こんばんわー

本日二度目のお邪魔な暮灘です（^^；

今回の【バカテス×緋弾】ちょっと実験的に、【三人の視点を三人称で、しかも別々の時間軸で語る】という手法を使いました（^ー^；）

この書き方だと【確定未来】になるという制限があるんですが、それはこの作品がパイロット版：【無数にある未来の選択肢の一つ】と考えて頂ければ（；^ー^A

まあ、でもこの【バカリア】の明久が、”体力と若さに任せたら、普通にシてても一人だと”壊され”そうなんで、何人かに分散させた方がいかなっと とか思ってます（笑）

まあ、明久は今回のエピソードにその片鱗が出てきますが、【覚醒ブラドに匹敵する”化物”】の可能性も否定できないし（汗）

そして、今回の目玉は…

【ロボット・レキ】ならぬ…

【忠犬レキ】

ですっ！！（o^_^）b
いや、書いてて可愛い可愛い

深夜アップ故、どれ程の読者様に読んで頂けるか不安ですが、楽しんで頂ければ幸いです（o^_^）b

武偵高校学生寮、食堂

集まる生徒達の熱気…

彼らは…

彼女らは…

どうしてここに集まったのか？

”武偵”ではないが、既に”武人”としては…【不正規戦のエキスパート】としては名を馳せていた”吉井明久”の呼びかけだからか？

それとも、赤ゴリラ…もとい。”赤毛の扇動者”の異名を持つ坂本雄二にそそのかされたからか？

断じて否！

全ては殉職した武偵にして遠山キンジの兄、”遠山金一”の名誉を守り、踏みにじられた武偵の誇りを取り戻す為の戦いに参加する為…

武偵憲章第一条

【仲間を信じ、仲間を助けよ】

それこそが、正義や悪というあやふやな物を越え、彼らが彼女らが遵守すべき物の全てだった…

既にミーティングは始まろうとしていた。

しかし、まるで自分達こそ真打ちだと言いたげに、二つある別々の入口から二人の少女が唐突に姿を現す。

対称的なヘアースタイルと色の髪 of 少女二人はほぼ同時に、

「強襲要員に空きはあるわよねっ!？」

「狙撃手に志願します」

と、告げた。

自分以外に同時に発せられた声に、二人は顔を見合わせる。

互いにあまり人付き合いが下手なせい、技量が圧倒的過ぎるせいか、あるいはその両方か…

良く言つて”孤高”という評判が付きまとう二人の少女は…

「えっ…? レキ、アンタって自分から売り込みすること、あるん

だ？」

「アリア…他人の騒ぎに首を突っ込むなんて珍しい」

と、互いの【彼女には友達いない（”少ない”ではない…）】的な評価を全肯定するような見解を述べた。

しかし、どう反応していいのか困ったのが、食堂に集まった武偵の卵達だ。

なんせ、【絶対にコイツらは参加しないだろう】ランキングの堂々1位と2位が雁首揃えてお出ましとくれば、驚かない方がどうかしてる。

しかし、それに全く動じてない者が約一名…

「心配しなくても、空席は山ほどあるよ 人手はどれ程いても困らないしね。熱烈歓迎だよ、お二人さん」

と、アリアとレキにウィンクする明久。

いい度胸をしてると言うか…いや、明久だけにこの二人が誰なのか分かってないのかもしれないが…

とにかく、これが…

吉井明久と彼を生涯に渡り支え続けた少女達…

”神崎・H・アリア”と”レキ”との初めての出会いだった。

少し時間を遡ろう。

ここに【神崎・H・アリア】ホームズという少女がいる。

”原作”と呼ばれる平行世界であるなら、彼女は【1年の3学期】に武偵高校に転校してくる筈の彼女だったが、”この世界の彼女”は受ける予定の仕事がキャンセルとなった為に【1年の2学期半ば】に転校してきていた。

だからこそ、平行世界ではニアミスしただけの

【浦賀沖海難事故】

にこうして関われるのだった。

かといって、アリアが東京武偵高校に転校してきた理由が変わる訳

ではなかった。

”平行世界”を知る読者の皆様ならご存知の通り、彼女の直接的な目的はあくまで【パートナー探し】であり、最終的には【冤罪を着せられた母親の無実を証明する】事だ。

ならば、彼女が入学して最初に【マスタイズ教務科】に行き、自分と一番相性のいい…言い方を変えれば、《背中を預けられる》相手を探す為に【アサルト強襲科】さほど不自然な話ではない。

生徒達の資料の中で最初に目を付けたのは、【遠山キンジ】という一人の生徒だった。

入学の時に【Sランク】のスコアを叩き出したが、それ以降は何故かパツとした成績を残していない不思議な生徒だった。

ちなみに、武偵ランクは通常A〜Eまで分類され、更にAの上に”スペシャルズ or スペシャリスト”を意味する特別枠の【Sランク】があり、その上に世界に数名しかいない【ロイヤルRランク】が存在している。

だが、資料を漁る内にアリアは不思議な事に気が付いた。

武偵ランクではなく、【純戦闘力評定表】という内部資料がある。

これは名前の通り戦闘力のみを抽出したデータだが…

その中に特異な名があったのだ。

キンジのように入学試験の一度きりではなく、常に【１年最強の戦闘力】と評価される少年の名があった…

いや、それどころか…

「ちよっ！？…入試で【エネミー（仮想敵）】役のマスター（教官）
三人を、たった一人で【救護科】アンビュランス送りにした…ですってえっ！？」
そう、その洒落にならない戦闘力を叩き出した少年の名こそ、

【吉井明久】

だった…

「…”ご主人様”の事を語るの？」

全ての物語が終わってから数年後…

レキは、愛しそうに明久との絆…彼女の名前が彫られた銀のネームプレートが下げられた”首輪”を撫でながら、

「最初、ご主人様にあつた時、直感でレキと同じ人種だと思った…勘違いだったけど」

レキは顔を赤らめ、そして幸せそうに、

「レキはご主人様の【飼い犬^{ペット}】だから、”人種”は変」

レキの話は少々纏まりが悪い…

というか、自分がどれだけ”ご主人様”に愛されているのか、あるいは自分がいかに”忠犬”なのかが、内容の90%を占める…

ぶっちゃけ、砂糖吐きそうノロケ話（甘々の調教シーン付）ばかりなので、当方でまとめさせてもらう。

というか、自分から…

「おねだりして”犬”にして貰った。人間は裏切るけど、犬は【真^{あるじ}の主人】と認めれば裏切らない。絶対服従が基本」

いや、そこで無表情でサムズ・アップされても…

というノリである。

とにかく、レキの話を纏めると、レキが初めて明久に興味を惹かれたのは、1年最初の【実戦演習】だったらしい。

入試で負傷し、武偵病院送りされた教官に代わり、【超能力捜査研究科（RSS：通称”S研”）からフラリとエネミー（仮想敵）役としてやってきた小柄で穏和そうな、どこか女性的な顔立ちの少年…

そして、その自分達と同じ1年生だという少年が扮する【たった一人の凶悪なテロリスト】の前に…

「1年の【強襲科^{アサルト}】と【狙撃科^{スナイプ}】を合わせた《強襲学部》は全滅した。勿論、レキも含めて」

そう…

その少年の名こそ、【吉井明久】だった。

【吉井明久】とは、何者なのか…？

何故、そのような”異常な戦闘力”を持っているのか？

もし、この物語が続くのなら…
その謎は、いつか明らかにされるのかもしれない…

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It・パイロット版・Episode00>

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

短いですが、何とか二本目をアップできてホッとしてる暮灘です)
^^;

皆様、【わんこなレキ】は如何だったでしょうか？(笑)

って、しよっぱなからそれかいっ!!
と、セルフツッコミしたりして(^_|^;))

連載を続けるなら、アリアと今回は美味しいとこ持っていったレキをしばらく明久の”ツイン・ヒロイン”にしようかな〜と思ってます。

う〜ん…どんな形であれ、【Episode00】は書き終えたいけど、その先はどうしようかな〜と(;^_|^A

取り敢えず、いつ投稿とはお約束できませんが、次回はあります…
多分ですが(汗)

では、またお会いできる事を祈りつつ――

皆様、おはようございまーす

昨日は二ヶ月振りに声を聞く親友と長電話してしまい、疲れて寝落ちしてしまった暮灘です（^^；

またしても変化球アップです（；^ー^A

というか、最近は回る動画にかなりムラがあって（泣）

泣き言はこれぐらいにして、今回のエピソードは…

【浦賀沖海難事故】の本格的な”報復”のスタートです（o^_^、）
b

あえて裏設定を書きますが、その【本質的な理由】は後々でできますが、明久は冗談みたいに高い戦闘力の割には、とても”武偵ランク”は低いんです。

今回は、その理由の一端が分かるエピソードかもしれません（^^；

あと、緋弾キヤラは勿論のこと、【武偵高校にいるバカテス・キヤ

ラ達【に”らしさ”が出てればいいなあと（＾―＾；）

とりあえず、そんな感じのエピソードですが楽しんで戴ければ幸いです（o^_^）b

武偵高校学生寮食堂（臨時ミーティング・ルーム）

「康太、理子ちゃん…クルージング会社で武偵に泥を塗った”首謀者”達の絞り込みは？」

明久の問い掛けに、

「バッチリだよーん」

「…今から動画ファイルと音声ファイル、並びに【冤罪】を作り上げる為の内部資料の文章ファイルを全員の端末に送信する…」

それは、まさに悪巧みの【証拠】であった。

正直、この動画ファイルをネットに公開するだけで十分な”反響”は得られるだろう。

実際にそう囁く生徒もいた。
しかし…

「康太、理子ちゃん。ぐっじょぶ」

いい笑顔でサムズ・アップする明久に、

「お誉めの言葉、だうも」

と、ウインクで返す理子に、

「フン…当然だ」

小さく鼻を鳴らす康太。

「”呼び水”には、これで十分だよ」

明久がそう言うのと、アリアは不思議そうな顔で、

「”呼び水”？」

「アリア、今回の任務の目的は何だと思う？ 推理してごらんよ」

「ぐっ…」

思わず言葉につまるアリア。

実はこのちっこくて薄っぺらくて平たいピンク色のロング・ツインテ少女は、現場でドンパチやら捕り物やるのは大得意だが、一族の皆のようにオフィスで幾百幾千、あるいは数万の可能性の中から「たった一つの正解」を探り出すような頭脳労働を大の苦手としていた。

どのぐらい苦手かというと…世界中にある”推理”という単語全てに、愛用のブラック&シルバーのキンバー社謹製クローン・ガバの2丁拳銃で風穴どころか蜂の巣にしたくなる程だ。

しかし明久は、何もアリアだけに聞いた訳ではないらしく、いつの間にか持ち込まれたホワイトボードに、

(1)

《遠山金一の汚名返上と名誉回復》

と書いた後に、

「でも、それじゃあ足りない…」

そう呟いてこう書き足した。

(2)

《同様の手口による武偵への冤罪(罪の擦り付け)を抑止する為のケース・デモンストレーション》

と…

「いい？ まず、キンジのお兄さんの汚名を返上と名誉回復は、作戦【第一優先事項(1stプライオリティ)】だ」

そして、明久は全員を見回し、

「そして、2ndプライオリティは…【類似の手口を未然に抑止すること】だよ」

そして明久の目付きが異常に鋭くなる。

普通の勉強は大の苦手、偏差値最悪の武偵高校の一般教科でも赤点スレスレの低空飛行をくりかえしてるが、それは即ち頭の回転が鈍いという意味ではない。

いや、むしろ時折人間離れした思考速度を見せる事すらあった。

「全員に心して聞いて欲しいんだけど…【浦賀沖海難事故】は、このまま放置すれば、必ず【ロクでもない】前例になる」

そして言葉を選択しながら、

「簡単に言えば、【何か問題が起きた時に武偵がいれば、それに罪を擦り付ければいい】って前例さ。そして、このケースは確実に更にまずい方向へ向かう」

「まずい…方向？」

明久がホワイトボードに書いた【罪を擦り付ける】という単語を見てから、アリアは少し顔色悪く、動揺してるように見えた。

「【問題が起こりそうな事態に意図的に武偵を雇い、問題が起きた

時に武偵に罪を擦り付ける。あるいは……」

明久は一呼吸置いて、

「【最初からスケープゴートとして武偵を雇う】」

”ざわっ
…！！”

一瞬、食堂が一斉にざわめいた。

「有り得ない……とは言わないで欲しいな？　人間なんて汚いもんだよ。金の為なら法律なんてクソクラエと思つてゐる連中がゴマンといふから、僕達みたいな【武偵】なんて商売が成り立つんだしさ」

すると坂本雄二は立ち上がり、

「なあ、みんな…明久は一人の武偵の名誉を守るってだけじゃねえ。将来的に武偵全員にふりかかるかもしれないねえリスクを、未然に潰そうって言うてるんだ…」

雄二は全員を見ながら張りのある男らしい声で、

「ここは全員で手を貸してやろうじゃねえか!!」

「オオツーーッ！！」

全員が雄二の呼び声に応える！！

武偵憲章第一条【仲間を信じ、仲間を助けよ】

ここに、【今回の作戦】における具体的な共通コンセンサスが生まれたのだった！！

坂本雄二…

例えば世界が違っていても、その【煽動】アシテートテクニックは健在らしい。

《ありがとう。雄二》

《いってこった》

目線で会話する二人の親友、その堅い絆に少し拗ねる翔子の肩を抱き寄せ、そつと唇を重ねる雄二…

顔をほんのり赤くした翔子は一気に上機嫌だ。

ちなみに度重なる雄二の【愛情表現】に、翔子の下着の中は水溜まりでもできそうな感じで、一部は溢れて太ももの内側を伝い初めてるが、いつもの事なので翔子は放置する事にしてる。

というより体液が染み込みまくったヌレヌレ&スケスケのぱんつの方が雄二が喜ぶ事を、翔子はよく知っていた。

だから、今夜脱がされるまでこのまま履き替えないでおこうとも…

金持ちお嬢様なのに、翔子の下着がどれもこれも妙に染み汚れが多いのは、この辺りが理由だろう。

ちなみに雄二は、翔子限定だが黄色や茶色の染みも大好きだったりする。

勿論、翔子は翔子で選択前の雄二の下着をくすねて、彼が不在の寂しい時にはクンカクンカしながらハアハアしてるのでおあいこだろう。

それはさておき、明久の話は具体的な振り分けに入っていた。

「康太と理子ちゃん達【探偵科】^{インケスタ}はリストアップした人物の発信機や盗聴器を使った尾行と監視を継続。そして、可能ならクルージング会社の【全員の社員名簿】と【別件での犯罪資料】を入手してくれる？」

「あいあいさー」

「具体的には？ 少しの絞りたい」

能天気に戻してくる理子とプロの目付きになる康太。

「訴訟を恐れて武偵に罪を擦り付けるような体質の経営陣が支配する会社だ…脱税に使途不明金、裏金作りに政治家への違法献金に暴力団へのマネー・ロンダリングなんかの横流し…二重帳簿に裏帳簿。そっちの方面で叩けば出てくる埃は山ほどある筈だよ？」

「…了解」

「翔子ちゃん達【情報科】^{インフォルマ}は、探偵科が持ってくる情報の解析と裁判で勝訴できる程の証拠固めをお願い」

「了解」

雄二の腕を胸の谷間に挟むようにして答える翔子。

「優子さん達【通信科】^{コネクト}は、公共放送とネット上でネガキャン（叩

き）やって明らかに世論を煽動してるクルージング会社の社員と【クルージング会社から金を貰って叩いてる”お抱えコメンテーター”】の特定をお願いしていい？」

「任せなさい」

と、姉らしく力強く頷く優子。

「優子さんがリストアップした人員を情報科、探偵科、諜報科^下共同で情報を徹底的に洗い出して欲しいんだ。そのデータを元に…」

明久は小さく薄く笑い、

「僕達【強襲科^{アサルト}】が、”実働”で動く。【狙撃科^{スナイプ}】はバックアップをお願いしたいんだけど」

「わかった」

「了解よ！」

レキとアリアはそう頷くが、

「あれ？ ”実働”って何をやるの？」

そう聞くアリアに明久はサラリと、

「【最重要容疑者】…ぶっちゃけ【今回の首謀者】の”確保”さ」

「えっ？…えっ！？」

その意味を理解した途端、アリアはフリーズする。
しかし、明久はそれを軽くスルーし、

「雄二、【尋問科】^{ダギユラ}は僕達が確保した容疑者の尋問をお願い。方法は任せるよ」

「あいよ。まあ…」

雄二はニヤリツと笑い、

「俺が【ダギユラのエース】って呼ばれる所以^{ゆえん}、見せてやろうじやねえの…！」

「…勢い余って殺さないでね？」

明久の言葉に雄二は楽しげな表情で、

「”尋問”で殺しちゃうのは、素人のやること。俺達玄人は、対象に【死んだ方がマシな状態】と思わせるのが仕事だぜ？」

その瞬間、雄二の事を知る全員が思ったという。

（（（（（やっぱ、真性サディストの【拷問赤ゴリラ】って二つ名、ガチだったんだ…）））））

「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ!!」

一通りの作戦説明が終わった時、そう切り出したのは、やはりアリアだ。

「それってもしかして、【民間人の誘拐】なんじゃ…」

「? そうだけど? それがどうかしたの?」

事も無げに言い返す明久に、

「法を守る武偵が…」

「神崎さん、だっけ? 目的と手段は一致させねばならない…それは分かるね?」

アリアが怪訝な表情をしながらも頷くのを待ってから、

「【悪党相手には、イカサマも手札の内】なんだよ」

「…どういう意味よ？」

「武偵憲章第一条【仲間を信じ、仲間を助けよ】…」

明久は真っ直ぐにアリアを見ると、

「法を守るより、僕は殉職した仲間の名誉と、余計なリスクを潰して”仲間の未来”を助けたい」

明久は小さく、

「ただ、それだけだよ」

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

明久の意外(?)なリーダーシップは如何だったでしょうか？

書き終えた後に気付いたんですが…

「キンジの台詞が一つもねえーっ!？」

いや、まあキャラが多い作品にはありがちって事でお許しを(^
^;))

ちなみに暮灘名物(笑)のエ 表現が途中で入ってるのは、シリアス一辺倒で書きたくないなあ〜と(^_|^;))

さてさて、本格的にストーリーが動き始めた今回ですが、果たして
次回はどうなることやら(;^|^A

アップ時期は断言できませんが、また次回も読者の皆様にお付き合
い戴ければ幸いです(o^_^) b

皆様、こんばんはー

高熱状態が続いたので、むしろ37度台だと発熱してる事に気付かなくなってる暮灘です（^^；

ご感想への返信や、活動報告へのお返事を棚上げしたまま執筆してしまいすみません（――）

ただ、少し言い訳を（^^；

暮灘、本日病院（わりと大きな総合病院）へ行つてたんです。

外来の内科病棟は、何故か妙に電波の入りが悪かったりします。

んで、診療予定が11時半だったんで、11時前には病院へ来ていたんですが…

「あで？ 11時半つてもう過ぎてるよな…？」

限られた場所以外は携帯厳禁の病院に対応する為、持ち込んでいたのが実はコミック版の【緋弾のアリア】だったりするんですが…

「あゝ、11時半に予約入れてた暮灘ですけど」

事務

「あつ、お待たせしてすみません。今日は急患が…」

そして更に時は過ぎて12時半…

「あの…ぶっちゃけ1時間以上前から待ってるんですけど」

事務

「申し訳ありません。すみませんが、午後の診察に回っていただけないでしょうか？」

午後の診察時間…

午後二時半開始…

「…SSでも書こ。ネタは手元にあるし」

という経緯で生まれたのが、このエピソードだったりします（；＾

― ^ A

病院で書いたせいか（笑）、暴力描写に一部生々しい物が有りますが、楽しんで頂ければ幸いです（o^_^）b

とある霧の深い冬の夜、クルーズ会社地下駐車場

『こちら【デュラハン（首無し）】。これよりミッションを開始する』

と某国特殊部隊並のスクランブラー装置（秘匿通話）内蔵のムツツリー・二商会謹製特殊通信機（改造ハンスフリー携帯）を使って出撃の意を伝える。

デュラハンとはアイルランドの民話に出てくる【首無しの騎士】で、同時に《死を予言する者》であり、間近に死する者の前に現れるという。

そういう存在であるが故に、吉井明久が【武偵以外の本業】の時に、も好んで使うコードネームだった。

（護衛は二人に運転手が一人か…）

駐車場には他に人影がないのは確認済み。

監視カメラには探偵科インケスタと謀報科レザドの精鋭チームが回線に乗っ取りダミ
ー画像で、無力化されている。

『んじゃあ、ボチボチ初めるとしようかな？…神崎さんは、すぐに
後ろについてバックアップ。万が一、僕に”討ち洩らし”があった
場合、お願い』

「了解…よっ!？」

返事を返したアリアは目を見張った…

(速っ!?)

とにかく、吉井明久の移動速度がデタラメに速いのだっ!!

しかも、足音が殆どしない…

(縮地!？ 神速!？ それとも重力操作系で相対加速する特殊能
力!？)

クルーズ会社の重役の一人…

【トラブル・シューティング】の最高責任者で、同時に【遠山金一スケープ・ゴート化計画】の計画立案者でもあるこの男…

歳の割には与えられた役職が高い事を考えると、《企業的な意味での汚れ仕事》の専門なのだろう。

どうやら、アメリカあたりで本格的な【かなり荒っぽい技術まで含むトラブル・シューティング対処術】を学んだだけあり、護衛役の人選は確かのようなだ。

少なくとも、田舎ヤクザの慣れの果てを、臨時雇用で雇っている訳ではないようだ。

もしかすると、純粋なボディガードとしてなら、二人揃ってそこそ

この程度には優秀な武偵と張り合えたかもしれない。

しかし、【純粹な戦闘力”だけ”ならS級武偵以上】と言われる明久では、いくらなんでも相手が悪すぎた。

そのモーションを、もし積分するならこうなるだろうか？

ボディガードA、死角から入りこんでくる明久に気付く。

懐に入れた伸縮式の警察用【電撃警棒】スタン・ロッドに手を伸ばす。

しかし、警棒に指が届く前に明久の掌底がボディガードAの顎先をアッパー気味に打ち抜き、脳震盪を誘発。

ボディガードB、何が起きたか分からない内にボディガードAを踏み台にした明久の斜め上から下に振り抜く空中回転蹴りで側頭部を強打され、同じく脳震盪。

明久、動きを止めずボディガードABが乗り込み閉めようとしてた車のドアに、懐から取り出した【閃光手榴弾（フラッシュ・グレネード：音や爆風は殆どなく、閃光で一時的に対象の視覚を麻痺させ、戦闘力を奪う）】を投げ入れ、運転手と”対象”を無力化。

そして仕上げに運転手と”対象”に、ボディガードから奪った電撃警棒を視覚が戻る前に最大出力で押し当て、念入り失神させる。

以上が、吉井明久という少年が10秒足らずの間に起こした行動の全てだった。

（何なのよ…コイツっ!?!）

アリアはつい啞然としてしまう…

慣れてるとか慣れてないとか、戦闘力が高いとか低いってレベルじゃないかった。

（この私の動態視力でも、追うのがやっとなんて…）

何というか…人間同士の同種間競争というより、むしろ…

（別の種族…？）

例えば、チーター。

別に水前寺 子やランボルギーニのオフロード車ではなく、本当にサバンナやらに生息してる猫科の肉食獣の方だ。その最高速は110 km/hに達する。

人類最速のスプリンターですら40 km/h前後…
3倍弱もの速度差があるなら、そもそも個体として比べる方が間違ってる。

まさにアリアは、その実例を目の当たりにした気分を味わっていた。

（アキヒサ・ヨシイ…本当に人間なの…？）

タイミングを合わせたようにやってきた、坂本雄二率いるダギョウ尋問科が重役の身柄を拘束し、どれ程調べても《足が付かない車》に荷物よろしく放り込む。

そして、笑顔で拳を合わせる明久と雄二。

「んで、護衛×2と運転手はどうすんだ？」

「武偵以外の…《本業のミッション》なら、後腐れなく”処分”するところだけどね…下手に証言台に立たれても面倒なだけだし」

明久はチラッと見ると、

「建前でも武偵やってる間は、ミンチで豚だか魚だかのエサは自重した方が良かな？」

明久は明日の天気を語るような気楽さでそう言っただけで…

「康太、このマヌケ共の家族写真とか用意出来てる？」

すると、明久以外は誰も【この場に存在してる事を気取らせない】程に気配を隠蔽していた土屋康太は、

「無論」

と取り出したのは現在、生存フラグが暫定的に立ってる三名の家族との一時を写したようなスナップ写真だった。

インゲスタ 探偵科とインフォルマ情報科が手を組めば、調べられない個人情報などないというが…確かに、その評判通りのようだ。

「んじゃあ、軽く警告だけはしとくかなあ」

明久はサインペンで三人の家族の顔の部分を丸で囲み、こう書き加えた。

” Which is you want? Dead or Alive.”

そのある意味《死亡^{デス・ノート}予告通知書》じみた写真を三人の懷に戻す明久を見ながら、アリアは…

「ねえ、レキ…」

康太程でないにしても、気付かない間に合流していたレキに、

「あれ…アキヒサ・ヨシイのジョークよね？」

と、肯定して欲しいという意味を籠めた視線でレキを見るアリアだったが、

「アリアが何をジョークだと思ったのかは、分からない」

とレキは小首をかしげ、

「でも…明久の言動は、全て本気だと思う」

「で、でも…」

するとレキは、彼女にしては珍しく”憐れみ”とも取れる視線をアリアに向けて、

「アリアが何を期待して明久に近付いたのか理解できないし、興味もない…でも、」

レキはただ真っ直ぐ…視線を弾丸とするようにアリアのデコを見て、

「明久を【武偵】としてしか見ないなら、これ以上深入りしない方がいい…住む世界が違い過ぎる」

「…どういう意味よ？」

「アリアは優秀な武偵…でも、明久は【生まれながらの”戦士”】（

ナチュラル・ボーン・ウォリアー）」だから……」

そして、レキはほんの少しの感情の揺らぎ……強いて言うなら、
”憬^{がれ}”に近い視線で明久をそれとなく見つめながら、
”憧^{あこ}

「【武偵に許された枠組みの中での秩序】…アリアには、遠山金次^{キンジ}
ぐらいが一番適当だと思う」

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

明久の【人間離れた身体能力】が明らかになり、またラストはレキが美味しいところを持って行った感(笑)がある今回のエピソードは、如何だったでしょう？(^^; ;

実は、【この時点では】レキのが明久に関してはずっと詳しくかったりします。

レキは明久の【武偵以前の活躍】や【武偵以外の活躍】も知ってる臭いですから(^^; ;

【バカリア】は、ちょっとした時間でも(そして、万全でなくとも)書ける話ですので、本気で作者自身もいつ次回更新なのか分からない話ですが、またお会いできる事を祈りつつ(o^_^')b

皆様、こんばんわー

相変わらずナース・ステーションが目の前にある重篤患者用病室で、
ベッドの上から執筆してる暮灘です（^^）；

果たして退院カウントダウンの患者が入る一般病室に移れるのは、
いつの日になることやら（泣）

え〜と、今回も入院前から書いてた【バカリア】の第6話を仕上げて
みました。

これで入院前から書いて書き溜め分はストック0。
次回の投稿からは、真正正銘の【病室シリーズ】になりそうです。

さてさて、今回のエピソードは…

レキの口から語られる【出会いの頃のエピソード】がメインですね
）

実は、明久に関する情報面ではレキが圧倒的にアリアをリードして
るのが判明します（笑）

まあ、スナイパーはスニーキングやストーキング（実は二つとも軍

事用語）も得意ですしね（^| ^ ;）

というか原作をご存知の読者様なら本編を読めばご納得頂けるかと思いますが、出会いでこんだけ格の違う戦闘力を見せ付けられれば、そりゃ”一族”の未来を背負ってるレキとしちゃあ、風の命令なくたってストーリーカー行為の一つや二つはするでしょう。

後は、明久の為に用意された【武偵ランク】と【その由来】も明らかになったり、二人の少女しか出てこない割に、中身を詰め込んだエピソードになっております（ ; ^ | ^ A

b こんなエピソードですが、お楽しみ頂ければ幸いです（o ^ - '）

それは殉職した武偵でキンジの兄、【遠山金一】の名誉と誇りを地に落として泥にまみれさせた首謀者の一人を捕縛する…

いや、【民間人を誘拐する】という明らかに違法性…いや、犯罪性が高いミッションの後の事だ。

「明久を【武偵】としてしか見ないなら、これ以上深入りしない方がいい…住む世界が違い過ぎる」

「…どういう意味よ？」

「アリアは優秀な武偵…でも、明久は【生まれながらの”戦士”（ナチュラル・ボーン・ウォリアー）】だから…」

そして、レキはほんの少しの感情の揺らぎ…強いて言うなら、”^{あこ}憧憬”に近い視線で明久をそれとなく見つめながら、

「【武偵に許された枠組みの中での秩序】…そこで生きるアリアには、^{キンジ}遠山金次ぐらいが一番適当だと思う」

レキは、キツパリと明久とアリアでは住む世界が違うと言い切っていた…

「レキ、もう一度聞きたいんだけど…それって、どういう意味よ？」

怒った様子でもなく、本当に分からないから聞くという口調のアリアにレキは、

「アリアが欲しいのは、【”武偵として”の最高のパートナー】に見える」

「…そうよ」

レキは少し憐れみを籠めた目線でアリアを見ると、

「なら、明久はアリアのパートナーに世界で一番不確実だと思う」

「なんでよっ!？」

気持ちいい程のザッパリ斬り捨てに思わず牙（犬歯）を剥くアリアだったが、レキはただ静かに、

「明久の武偵ランクは…本当の”最低”」

「Eランク武偵って意味？　ランクなんて、あたしに言わせればさして意味なんか…」

しかし、レキは首を横に小さく振り、

「違う。その下…」

「へっ？　武偵ランクの底辺って、Eランクでしょ？」

アリアの言葉をレキは否定し、

「その下は、公にされてないだけで存在する…明久は、今のところ世界で只一人の【F組^{ランク}の武偵】」

「ちよっ！？　”Fランク”って何なのよっ！？」

前に軽く書いたが、武偵ランクは、良い意味で”例外”を意味する【Sランク】と、その上の”（人間の）規格外”を意味する【Rランク】を除けば、A〜Eまでしかランクは存在しない。
勿論、優秀なのはAで駄目なのはEだ。

では、普通は”F”は何を意味するかと言えば…

武偵のスコアに記されてる場合で言うなら《Fault》の略。

つまり《失敗》《失格》《落第》を意味する略語だ。

例えばであるが、通知表の評価欄に”F”と入っていれば、普通はその教科は”落第”という事になる。

「Fランクの武偵なんて有り得ないでしょっ！？ いや、例えあるとしても…」

アリアは先ほどの【手慣れてる】という表現では言い表せない明久の動きや手際を思い出しながら、

「あれだけの戦闘力を誇るアキヒサ・ヨシイが、Fランクってのはどう考えても納得いかないわっ！！」

噛み付くように反論するアリアだったが、

「その【吉井明久の戦闘力】の理由…想像つく？」

「えっ…？ え、S研（SSR：超能力捜査研究科）にいる【超偵（超能力武偵）】だから…とか？」

「…的外れ。確かに明久は分類上、【超偵】。だけど、先天的特殊能力の強さが、そのまま戦闘力に結び付かないのはアリアだって知ってる筈」

レキの指摘にアリアは頷き、

「まあ、あたしも”能力者”は何人か捕まえてきたし…」

「武偵は超偵に勝てないのは所詮、一般則。やりようによっては、例えば世界最強の【能力者】だって仕留める手段は数限りなく存在する。でも明久には…」

レキは、もう一度熱の籠った視線で明久をチラツと見ると、

「明久には、これといった【有効手段】は存在しない」

「えっ？」

「少なくとも私は、『初めての敗北』から幾度となく対戦させて貰ったけど…これといった弱点は、『身体的特徴上、私には選択不能の戦術オプション』ぐらいしか発見できなかった」

恐らくレキが言ってるのは”ぷるんぷるん”とか”たゆんたゆん”という擬音のつく胸部の事だろうと思われるのだが…今は深くは追求すまい。

「レキ…アンタってアキヒサと戦った事、あるの？」

レキは小さく頷き、

「アリア…明久が武偵高校の入試の時、仮想敵役の【教員】^{マスター}三人をたった一人で返り討ち。【救護科】^{アンビュランス}送りにしたって事実、知ってる？」

「それは調べたわ。俄には信じられないけど…紛れもない事実みた

いね」

実はレキ、その返り討ちにあった教官と明久の間に浅からぬ因縁：

【日本以外の場所であつて殺り合つた事がある】

という話までつかんでいたが、それをわざわざ恋敵ライバルに話してやるほど、レキは聖人君主ではない。

「その後の顛末は？」

「その後の顛末……？」

おうむ返しに聞き返すアリアに、

「明久はその後、三人の教官が復帰するまで代理……正確には、テロリストを含む犯罪者の手口を叩きこむ【仮想敵アンダーステディ
エネミー・ワン】として、私たちの前に姿を現した……」

一学期某日、特別野外練習場（通称”キル・タウン”）

そこは【学園島】の中でもかなり特殊かつ大規模な練習施設だった。何しろ長さ400m×幅200mに渡り、まるで大作映画のセットのように【街並み】が丸々再現されてるのだ。

目的は言うまでもなく、武偵の主舞台とも言える【市街戦を含むあらゆる《街での活動》ストリート・ワークをシミュレートし、訓練する為】である。

その日、レキ達^{スナイプ}《狙撃科》の一年生は、”キル・タウン”に集合をかけられた。

そこにひょっこりと姿を現したどこか少女のような印象がある、人畜無害そうな線の細い少年：吉井明久は、

「僕はここに立ってるから、狙撃科のみんなは今から5分以内に狙撃ポジションをとり、僕を狙撃して欲しいんだ」

そしてニツコリ微笑み、

「キル・タウンのあちこちには評価用の”センサー（観測機材）”

が設置してあるから、狙撃地点やタイミングなんかも評価の対象になるよ」

と、明久はどこか楽しげに言ったのだった。

レキ達狙撃科に言わせれば、何とも緩い授業だった。

なんせ標的は見晴らしの良い場所で静止する《座ったアヒル（シッティング・ダック）》状態で、しかも30人以上いる狙撃側は狙撃ポジションについて、事前にスコープで明久を狙っていいというのだ。

最早、これは狙撃というより縁日の射的だ。

明久の（当時は）噂…入試で教官三人を返り討ちにしたというのは全員が耳にしていたが、あまりにも悪条件過ぎた。

なんせ明久一人に対して30丁以上狙撃ライフルが四方八方から狙われている。

普通なら有り得ない【狙撃銃の弾幕射撃】…回避できる人間なんていない筈だった。

しかし…

「それじゃあ、そろそろ始めるよ。よい…スタート！」

各人が持つてる無線機に明久の声が響いた途端、

”ビュン！”

明久を狙っていた全ての狙撃者の視界から、彼の姿が消えた！

狙撃ライフルに標準的に使われる【光学照準器^{スコープ}】は、平たく言えば銃用照準線の入った”精密望遠鏡”だ。遠くを見える分、視野は狭い。

明久がやった事は単純だった。スタートの言葉と同時に全てのスコープの視界から飛び出したただけだ。

そう、ここに一つの心理的な罠があった。

狙撃者は、【標的が静止してる】という先入観があった。

つまり、スタートと同時に引き金を引けば簡単に命中させられると。

しかし、明久は狙われてる事を知っている…それどころか、あえて自分に不利な条件をだしたのだ。

当然、そこには裏があると想像すべきだった…

答えを先に言ってしまったえば、明久は【自分が静止してる】という先入観を持たせる事で、狙撃者達から【自分が動いてる場合】という戦術オプシヨンの思考を奪い、同時に全ての狙撃ライフルの射線と照準を一点（自分）に固定してしまったのだ。

そして、彼が静止していたポイントは入念な下調べをした上で、狙撃の視界を妨げる遮蔽物にすぐ飛び込める立ち位置だった。

更に”スナイプ”の生徒達は、肝心な情報を知らされてなかった。

そう、【人類の規格外】と呼べる明久の身体能力だ。

参考までに一例を書いておけば、明久の最大走行速度は最良の条件なら120km/hを超え、また3秒足らずで100km/hに達するのだった。

つまり明久は、引き金が引かれ撃針が雷管を叩く前に、全員のスコープの視野から消えていた。

そして残ったのは、明久のいた地点に虚しく立つ昇る、無数の着弾の土煙だけだった。

だが、【明久】の罨はこれで終わりじゃなかった…

”ドオン！”

”バガンツ！”

”ドン！”

明久が視界から消えると同時にスナイプの生徒達が陣取る”狙撃地点”各所で、同時に爆発音が響き渡った！

そう、それは明久が仕掛けていた【偽装トラップ】^{フイビー}…

明久が開始前に言っていた”センサー”が、爆発したのだ！

正確には、センサーに偽装した《指向性対人地雷^{クレイモア}》や《跳躍対人地雷^{バウンシング・ベ}》のペイント弾を収めた訓練バージョンがあちこちで爆発し、生徒達を塗料まみれにしたのだった…

消えた明久の姿を探す事に意識を奪われていた生徒達は、その刹那の事象に対応できる筈もない。

そう…

このたった一度の【攻撃】で、1年狙撃科は”全滅”判定を喰らったのだ。

「最初から私達は明久の掌の上だった。明久は自分の姿を晒し、自分を《座ったアヒル》と思い込ませる事で、私達の戦術オプションを削り、まんまと【自分の位置から逆算】する事で私達の狙撃地点を割り出し、前以てトラップをしかけていた…」

そうなのだ。

明久が止まっているという事は、そこを狙撃できるポイントはおのずと絞られる。

なら、そこに前もって罠を仕掛ければいいだけの話だ。

「それってまるで、熟練テロ…」

困惑した表情のアリアにレキは、

「アリアと同じような…」卑怯だ。それはテロリストの手口だ」と苦言を喚いた生徒もいた。でも、明久は…」

『あれ？ 僕達の戦う相手は、その《卑怯な手口を常套手段》とする連中じゃなかったっけ？』

「…正論よ」

アリアも納得するしかなかった。

実際、アリアは欧州で”98人”の重犯罪者を捕まえてきた腕利きの武偵だ。

だからこそ、正々堂々と戦う犯罪者などいないのは百も承知。

蛇足ながら、《平行世界（原作）》より捕縛犯罪者が1人少ないのは、その99人目が組織ごと【この世から消滅】してた為、依頼自体がキャンセルになったせいだ。

だからこそ、原作より一足早く東京武偵高校に来れたのであるが…

「確かに先入観や固定観念をとことん利用するねが犯罪者…特にテロリストの手段だもん。でも…」

アリアは小首をかしげながら、

「アキヒサは一体どこで、そんな高度不正規戦のスキルを…？」

少なくとも【只の16歳】が持つスキルでない事は確かだ。

「それは逆」

「えっ？」

レキは、今一つ奥底が見えない瞳でアリアを見つめながら、

「明久は、そもそも【殺さずに標的を制圧する方法】を学びに武偵校に来た」

「えっ？ えっ？」

「武偵は犯人の生け捕り…【犯罪者の生存捕縛】が最大の任務であり、評価のポイント」

レキは視線を然り気無く帰り支度を終えようとしてる明久に移し、

「でも、明久は逮捕も検挙も今のところ0だから」

さらりと言つてのけるレキだったが、アリアは慌てて、

「待つて！ その意味って…！！」

レキは頷きながら、

「その想像で正しいと思う。だから、アリアと明久は、パートナーとして成立しない…」

そしてレキは、やけに断定的にこうアリアに宣言するのだった。

「明久のパートナーにふさわしいのは、彼と同じ”戦場”に立てる人間だけ…」

それはまるで、明久にふさわしいのは貴女ではなく私だと…

少なくともアリアには、レキがそう言葉に出さずに言っている気がした…

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

病に邪魔されずと書きかけだった【明久の過去の断片】を書いて、
少しだけ安心してる暮灘です(^ ^ ;

実は土日は、医師が常駐してない為に大きな検査や治療がないので、
(体力があれば)割りと執筆に時間が割けたりするんですよ

ただ問題なのは体力で、病氣と長い入院生活の為にすっかり落ちて
しまい、集中力を維持できる時間が随分と短くなってしまいました
(泣)

さて、明久の【過去に示した戦闘力と性格】や、レキの明久への想
いやレキとアリアの二人の対比等はいかがだったでしょうか？(^ ^
^ ;

多分、”うちのレキたん”は原作より面白い性格してる上に存外に
策士で、しかもクール& a m p ; 淡泊なフリして粘着質(笑)の気
配が…

このエピソード00も残すところ後2〜3話程度ですが、次の更新が

いつできるのかは正直とても心許ない状況です。

そんな現状ですが、次回もお付き合い頂ければ幸いです
()

皆様、おはようございまーす

本日も病室から中継の暮灘です（^^；

なんか、最近の和みは”心臓リハビリ”という泣きたくなる現実が、心を削るなあ（泣）

さて、暗い話題はさておき、なんと連続で【バカリア】の投稿です（；^ー^A

いや、【Episode00】は残り少ないんで、このまま病室執筆で完成させて、退院の暁には正規連載に繋げようかと（笑）

さて、今回のエピソードは話的には非常に地味です。

ただし、スパイ小説や犯罪小説が好きな読者様なら、中々面白い作風になってるのではないかと（^ー^；）

とりあえず、ひたすら派手な原作にはない、【外堀がじわじわと埋まる感触】みたいな物を表現できてればとなあ〜と。

ついでに、またまた緋弾のアリアから一人（名前だけなら二人）参戦してたりしてます

とりあえず、こんなエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです
(o^_^)(b

「結局、あの頃のあたしは…アキヒサの事をよくわかってなかったんだと思うわ」

神崎・ホームズ・アリアは、後に振り返りそう語った。

「あの時のあたしは、この世界のどこかにあるかもしれない【正義や真実】を信じてたのかもしれない…」

彼女は顔を上げると、

「でもさ…アキヒサはとづくに知ってたのよ。この世界がどんなに残酷で冷徹な場所かって事に…」

そして、どこか遠くを見るように…

「アイツはずっと…そんな醜くて冷たい”真実”と、生まれた時からずっと向き合ってたんだから」

数時間後、三浦半島、某小港

プロジェクト・リーダー
計画主任である明久は、今回の作戦があらゆる意味で非合法なのは
百も承知していた。

だからこそ、武偵高校（学園島）の埠頭は使えない。

ならば、どうするか？

実は四方を海に囲まれた島国日本には、レジャー用のクルーザーや
ヨットが主に停泊する比較的小規模な港マリナーやヨット・ハーバーというのはことのほか多い
のだ。

特にマリンスポーツのメッカとも言える湘南から西の神奈川県沿岸
部には、それこそ無数に点在していた。

そして、ここ…

【小西マリンハーバー】

もそんな人知れず存在する、小さな入り江にを利用して作られた港の一つだった。

基本的に私有のクルーザーを停泊させる港のようで、それこそ国産ノ輸入を問わず《金持ちのステータス・シンボル》とも言える様々な形のクルーザーが舳を繋いでいた。

まさに好景気だろうが不景気だろうが、金はあるところにはある事を証明するような光景ではあるが、今は冬で船遊びを楽しむには完全にオフ・シーズンで本来なら人影はまばらだった。

しかし、その一角…そのハーバーに停泊する中でも一際大きなクルーザー《アンナマリー号》の周囲だけは、港が閑散とするこの時期には珍しく人の行き来が活発に行われていた。

ただし、どう見てもマリン・レジャーを楽しむに來た集団ではない。

下はジーンズやチノパンなんかのバラバラのスボンに、同じくバラバラのスニーカーという組み合わせだが、上半身は揃いのジャンパーと帽子…同じ《会社のロゴ・ワッペン》が貼り付けられたMA-1フライト・ジャケットの安っぽいレプリカとベースボール・キャップに統一されていた。

その《ロゴ・ワッペン》にはこう記してある。

【アルニコ管財保障】

【小西マリンハーバー】事務局、応接室

「いや、助かりましたよ。まさか、『あの浮かぶ産廃』を無料で引き取って貰える上に、滞納していた停泊料までお支払ただけなんて」

と、40代後半ぐらいだろうか？

少し頭の天辺が薄くなっているが、人の良さそうな【小西マリンハーバー株式会社】の専務、小西博保^{ひろやす}は…

「しかも、まさかご丁寧に現金でご持参頂けるとは」

満面の笑顔でまだ20代そこそこと思われるが、見るからに高級そうなダブルのスーツを、180cmを楽々超える堂々とした体格に隙なく着こなす赤毛の青年に営業スマイルを浮かべた。

「当然の事ですよ。小西専務」

ほんの数分前、応接室のテーブルに置いたスーツケースを開き、中にぎっしりと詰まった札束を見せつけた、いかにも辣腕若手ビジネスマン風の赤毛の青年は、

「我々【アルニコ管財保障】は、顧客の皆様に”最大限のご満足”いただけるサービスの提供をしていますから」

と事も無げに言っただけだ。

少し背景を説明しよう。

【小西マリンハーバー】にとって、《アンナマリー号》は尽きぬ事の無い頭痛の種だった。

かつて、とある富豪によって発注され、まるで他のクルーザーが家臣のように見える巨大な船体を浮かべながら、長く小西マリンハーバーの象徴のように扱われたアンナマリー号であったが…

ある日、その富豪が投資に失敗し、巨大な負債を抱えて破産したことから、アンナマリー号の転落が始まった。

本来ならば資産整理で競売にかけられ処分される筈のアンナマリー号であったが、とにかくタイミングが悪かった。

競売に出されたのが、たまたま【この世界の”日本”】では珍しい不景気な時期（この世界の日本は、好景気でも不景気でもない時期が長いらしい）で、結局は買い手がなかった。

そうこうしてるうちに不景気は終わったが、その頃にはアンナマリー号は既に【老朽船】と呼べる程の船齢に達していた。

考えてみれば競売にかけられた時期ですら既に随分と型遅れの船だったのだから、無理も無いだろう。

更にその間に船舶法が変わり、新しく制定された安全基準に満たさないアンナマリー号は、船舶としては使用できない：廃船にしてスクラップ（クズ鉄）として売るしかないという状況になってしまったのだ。

当たり前だが、そんな不良物件まんまの船を買いたがる物好きはそうそういない。

そして、アンナマリー号が売れ残る間、ずっと停泊させていたのが小西マリンハーバーなのだ。

勿論、停泊料金は滞納されたままだ。

一時は、その滞納停泊料を盾にとり、アンナマリー号を主張&入手して《水上ホテル》に改装するというアイデアも出たが…

結局は改装費用から考えて、どう考えても採算とれそうもないのであえなくボツになった。

しかも船舶法の改正によってアンナマリー号は船として使えなくなった為、残る道としては曳行し廃船というのがメインだが、それもまた金がかかる。

結論としては、もっとも金がかからないのは、アンナマリー号の買い手がつくまで放置するという消極策しかなかった。

だが、10日ほど前に「アルニコ管財保障」を名乗る、アンナマリー号の元オーナーの負債を、「現在管理してる会社」から連絡が入り、アンナマリー号の買い手が海外で見つかり、また滞納されていた停泊料も払うと打診してきたのだ。

小西マリンハーバーにしてみれば、文字通りに《渡りに船》だった。

交渉はトントン拍子に進み、5日前からアルニコ管財保障の《先見隊》…アンナマリー号が自立航行できる状態にする為の整備隊が入り、また契約が完了する今日は更なる作業員や《搬入物》と共に、アルニコ管財保障の若手重役が札束を詰め込んだスーツケース片手にやってきた…

少なくとも《小西マリンハーバー側から見れば》、それが事実であ

ったし、またそう思い込ませるように【筋書き（プロット）】が練られていたのだ…

そう…

勘のいい読者の皆様ならば、既にお気づきだろう。

【アルニコ管財保障】

という会社は、現実には存在しない…明久が、親友の坂本雄二（尋問科：ダギユラ）に霧島翔子（情報科：インフォルマ）、そしていつも頼りにして姉のように慕う木下優子（通信科：コネクト）らと知恵を出し合い、【この作戦】の為にでっちあげた架空の会社だった。

そもそも発端は、第1話で明久がキンジにショットガンぶっぱなした更に前まで遡る。

浦賀沖海難事故とその後の顛末、星伽白雪からのキンジがヒッキーになっっているという情報：

実は吉井明久の頭脳は、この段階から急速に回転を始めていた。

勉強は全く駄目：というより、まともに義務教育を受けてない明久であったが、こと戦闘に関する限りは思考のレベルが全く違っていた。

明久は、状況を整理しながら足りない部分を推理し、そして即座に

【遠山金一の名誉を回復させると同時に将来的に武偵がスケープゴートにされる事を未然に防ぐ作戦】

を立案した。

真に明久が優れている部分の一つは、自分がどれほど高い戦闘力を誇るとしても、決して”一人よがり”にはならない所だろう。

明久は、自分の立案した作戦に、必ず自分が見過ごし気付かない穴がある事も分かっていた。

だからこそ、優子／雄二／翔子に加え、更に探偵科最強の土屋康太
インケスタと峰理子らも交え、足りない部分を肉付けしながら徹底的に練り上げたのが、今回の作戦だった。

そして、そのミーティングで明久が聞いたのが…

『優子さん…』

『なに？ アキ坊？』

『どっかの港に、持ち主不在のまま放置されてるクルーザーとか無
いかな？ それもなるべく大きいタイプで』

『探せばあると思うけど…どうするのよ？』

『ん…強いて言うなら、とりを飾る《最後の演出》ってとこかな
あ？』

そんなやり取りの後、情報科と通信科、更に諜報科しほうの一年有志一同
により、白羽の矢が立ったのが、【小西マリンハーバー】に停泊し
ていた《アンナマリー号》だったのだ。

そう、もうお察し戴けたと思うが…

《アルニコ管財保障》のロゴ・ワッペンがついたジャンパーと帽子を装着しながら作業をしているのは、全員が今回の作戦に参加している武偵高校の生徒であり、また小西専務と交渉している《赤毛の若手ビジネスマン》は、他の誰でもない”坂本雄二”である。

意外や意外。

雄二は、このようなアンダーカバー（なりすまし）にとことん向いてる逸材なのだ。

それと言うのも武偵高校卒業と同時に《霧島雄二》になることが決定してる為、小学校高学年の頃より、雄二は礼儀作法やビジネス・マナーを学び、また【霧島家の人間にふさわしい立ち振る舞い】を学び自らを研鑽した。

はつきり言おう。

偏^{ひん}に翔子への愛ゆえになせる技である。

実は互いにベタ惚れ、お互いの体臭がないと夜も眠れないぐらい溺れあってるのが、雄二と翔子であった。

同時刻

小西マリンハーバー、埠頭、アンナマリー号前

「剛氣、お疲れ様」

そう声がかかり、《アルニコ管財保障》のジャンパーを着た車輜科^{ロジ}の武藤剛氣が振り返る。

「おう、明久！ そっちの守備は？」

「上々だよ」

と、明久はいつも通りの少し気の抜けた返事を返した。

そう。

先に出てきた5日前からアンナマリー号の整備を行っていた《先見隊》とは、車輜科と装備科^{アムド}の混成整備部隊だった。

明久からの依頼は、『アンナマリー号を自立航行できる状態に仕上げて欲しい』であり、武藤達はそれを完全にこなしていた。

「そっちはどう？　楽しめた？」

明久の言葉に武藤はニヤリツと笑い、

「型は古いが、かつては”名機”とまで言われたボルボ社の船舶用ターボ・ディーゼルだ！　いや、イジツてて楽しい楽しい」

さすがは乗り物ヲタの武藤である。
その笑顔は実に輝いていた。

「ところで、”文”^{あや}は中？」

「ああ、”平賀さん”なら船内だぞ」

明久は、『ご主人様にせーよく処理以外の命令をされたのだ』
と無邪気に大はしゃぎしていた武偵高校最小サイズのちっこくて平べったくて愛らしいようじ。ゲフンゲフン。少女の姿を思い浮かべながら、

「また失神するまで、ご褒美あげないとね」

（文はまだ”来てない”から、孕めないし…）

と小さく呟く。

吉井明久と装備科の平賀文…

実はこの二人、武偵校に入学する遙か以前から主従関係であるのだが…

その秘密もいずれ語られるかもしれない。

そして、明久は思考を切り替えて次々とアンナマリー号に運び込まれる《搬入物》…中身が見えないコンテナを見る。

そう、そのコンテナの中身は、言うならばまだ新鮮な”生肉”…

先に出てきたように、作戦の最終段階で”捕獲”したクルージング会社の重役や、それにまんまと煽られ…いや、金銭受諾で意図的に煽動していた《アンベリール号》の乗客、更にクルージング会社から同じく金で武偵に泥を被せたマスコミ関係者等々…

そう、その《搬入物》の中身は、明久を中心として選別された【A級犯】達だった。

明久は、そのコンテナ群を見ながら喉の奥で微かに笑っていた。

「さあ…楽しい楽しい”宴”の始まりだよ」

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It・パイロット版・Episode00>

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

いよいよ、【バカリアEpisode00】もクライマックスに近
付いて参りました(^^;) ;

アンベリール号に何となく名前が似てるアンナマリー号(笑)

実はこれが明久の”意趣返し”、最後の一欠片^{ピース}だったりするんです
が…

しかし、この【バカリア】の明久って、敵対した相手にはとことん
容赦とか慈悲とか手加減ねえッス(^^|^^;) ;

さて、この【Episode00】を書き終えたら、いよいよ連載
準備に入りたいなあ…とか思ってますが、果たして需要はあるので
しょうか？

読者様のご感想が少ないシリーズなので、些か心配ではありまする
(^^;) ;

あと、恐らく2〜3話だと思いますが、最後までお付き合い頂けれ
ば幸いです(o^_^)(b

皆様、こんにちばー

連休となるクリスマスイブ、皆様どう過ごされていますか？

暮灘は、今年は病院のベッドでクリスマスを迎えるのが確定です（泣）

本気で気が滅入るクリスマスですよ。

ああ…本気で脱走したい。

それはともかく、今回のエピソードは…

明久達のこれまでの一連の流れの総括と、明久の【最終段階】への繋がりまとめが描かれています（^^）

何と言うか…バラバラに描かれていた描写が、依り集まり一本の線になるような雰囲気を出せたら勝ちかなと（笑）

更に蜘蛛の糸のように絡みつき、クルージング会社やそれに組みした者達がズルズルと罠に墜ちる雰囲気が出せればなおいいかなと

そして、万を持してバカテスから某キャラ推参

ああ、何だかまた波乱のトリオが生まれそうな…

「康太、爆発しろ！」というか、「康太、乙」というか（；^|^A

明久と文の【隠す気皆無の関係（笑）】とかの描写も交えつつ、最後は相変わらず主人公（？）が締めてくれます（^|^；）

というかラストの理子の心の眩きは、実は作者も大いに同意だった
りして（^|^；

こんな感じのエピソードですが、お楽しみいただけたら幸いです（
o^_^）b

その日は、武偵《遠山金一》を陥れ、その死と名誉に泥を塗ったクルージング会社にとり、創業以来最悪の日だったに違いない。

最初に行われたのは、純粋なサイバー攻撃だった。

いくつものプレクシーを通して様々な方面から行われたクラッキングは、クルージング会社の電子的な意味での目や耳を潰した。

業務妨害臭いが、無論それが本来の目的ではない。

そして、第2段階…

クルージング会社が自社のコンピュータから反論できないようにして、そして情報戦で常に後手に回るように下地を作ってから…

「さあ〜て、”^{レザ}謀報科”のみんな…ボク達の腕の魅せ所だよ〜」

と、諜報科のコンピュータ・ルームで緑のショート・ヘアと八重歯がチャーム・ポイントの【工藤愛子】の声が爽やかに流れる。

そう、やはりと言つべきか？

工藤も《東京武偵高校》にちゃっかりいたのだ。

しかも本来なら彼女は極めて高い【発電能力】や【電波や磁場操作】能力を持つ超能力武偵…いわゆる《超偵》で、【超能力捜査研究科（SSR：S研）】に在るべき人材の筈なのだが、本人曰く…

『だってS研よりレザドの方が面白そうじゃん』

という理由で諜報科にいる変わり種だった。

それが本音かどうかは定かではないが、現在楽々《A級武偵》になつてゐるあたり、この現代版《くノ一》の肌には合っているようだ。

そして、彼女の陣頭指揮のもと、諜報科有志一同があらゆる動画サイトを中心とする情報サイトに動画、静止画を問わずバラ撒いてゐるのは、探偵科インクスタと諜報科が必死で集め、情報科インフォルマと通信科コネクトが解析して裏付けした…

【クルージング会社のあらゆる犯罪資料】

だった。

その中身はダミー会社を利用した脱税に、ペーパー・カンパニーをトネル会社にしたマネー・ロンダリング、政治家や権力者への違法献金等々多彩多岐に渡っていた。

そして、既に同様の資料と証拠は内部告発文章の形をとり、匿名で東京地検特捜部に持ち込まれ、内定調査が始まっていたのだった…

前に明久が康太や理子に、『裁判で勝てるレベルで纏めて欲しい』と言った理由が、これだったのだ。

諜報科と同様の光景は、霧島翔子が陣頭指揮をとる情報科インフォルマのコンピュータ・ルームや、同じく木下優子が陣頭指揮をとる通信科コネクのコンピュータ・ルームでも見られた。

諜報科、情報科、通信科…

一年生が中心とはいえ、カタギでは有り得ない…というか、カタギの高校生が【知ってちゃいけないサイバー・テクニク（笑）】を駆使して一斉にネットワーク上に《情報の弾幕射撃や絨毯爆撃》を行う彼女達は、実に巧妙で同時に容赦無かった。

工藤愛子の武偵レベルが出たついでに言えば、翔子も優子もついでに雄二も、それぞれの分野で《A級武偵》だ。

無論、今回の作戦でもその評価を裏付けるように、腕前を如何なく発揮していた。

そして、作戦は第3段階へと入る。

【クルージング会社の悪事の証拠】のネット流出から僅かなタイムラグを置いて流れたのは、【クルージング会社に金銭受諾したりそのかされたり、あるいは煽られたりして《遠山金一と武偵を叩いた人間》の個人情報】だ。

それは実に徹底しており、クルージング会社の社員は末端にいたるまで一人残らず顔写真／住所／氏名／電話番号／メールアドレスが公開され、また【特に悪質】と判断された人物に関しては、取引先や家族や友人まで無慈悲に個人情報がばら蒔かれた。

【個人情報保護法】もへったくれもない情報の嵐だ。

そう、この時点でネットワークのアチコチで祭と炎上が頻発していた。

いや、それどころか個人情報公開された者に対する、メールや電話での”直接口撃”すら始まっていた。

普通なら、このような状況ともなれば企業なら【火消し役】^{トラブル・シューター}が、個人でもそれなりに芸能人なら事務所等を通して弁明に動くものだが…

だが、皆様も覚えているだろう。

既に【特に悪質】と判断された人間は、意識を奪われた状態でコンテナ積みめされ、装備科と車輛科^{アムド ロジ}の共同作戦で精密無人航行が可能ないように改造された《アンナマリー号》へ搬入され、今頃は既に【浦賀沖】へと向かってる頃だ。

そう、クルージング会社には、このような事態に対処できる人間は既におらず、またクルージング会社の重役や責任者と”同罪”と判断された者達は、音信不通となっていた…

第1段階

クルージング会社にサイバー攻撃を仕掛け、機能をパンクさせる事で、迅速な情報収集と対処の方法を奪う。

第2段階

【浦賀沖海難事故】以外のクルージング会社の【犯罪証拠】を流布する事により、会社の社会的信用を失墜させ、同時に《発言の正当性と説得力》を喪失させる。

第3段階

個人情報情報を散布する事による更なる情報学的な意味で【意図的な混乱と錯綜】を演出し、《クルージング会社（敵対勢力）》の反撃機会を奪う。

では、その次の段階…第4段階とは？

『だから…俺達は…』

『あの武偵に罪を着せた…』

『全ては上の命令だっ！ 俺は悪くねえっ！！』

そう、それは坂本雄二率いる”尋問科”^{ダギユラ}の努力の結晶のような動画だった。

時間的に言うなら明久とアリアの強襲科^{アサルト}やレキの狙撃科^{スナイプ}が《確保》し、薬で眠らされてコンテナに箱詰めされるまでの間に行われた、尋問科名物…

【死なない程度に痛めつけて吐かせる尋問法】
を使って録画した画像の数々だ。

それにしても醜い内容だった。

自分達がいかにして【死んだ武偵を哀れなスケープゴートにしたか？】の手口の暴露はともかく、最後は罪の擦りあい、悪いのは命じた方で自分もまた被害者だと言い出す始末で、命じた側も命じた側で会社を守り、社員を路頭に迷わせない為には仕方なかったとお涙頂戴の自己弁護に終始していた。

まさに自分の言動責任を棚上げした自己保身のみが感じられる動画…

そして、その軽蔑すべき発言を聞けば、【浦賀沖海難事故】の《真実》が分かる。

少なくとも、まともな思考のできる頭を持つ人間なら、誰でも理解できる図式だった。

【遠山金一の名誉を回復】させるだけなら、これでも十分かもしれない。

しかし、計画立案者の吉井明久にとっては、まだ作戦の半分も終わってない。

【武偵を利用もしくは悪用しようとする組織や勢力に対する最大限の警告】

を発する為には、更にもう一段階……
より強烈なインパクトが必要だった。

そして、【小西マリンハーバー】から戻ってくる《実働部隊》：

戻ってくるなり明久は、主だったメンバーに臨時ミーティング・ルームとして使う学生寮食堂に集合をかける。

続々とノーパソ片手に集まってくる生徒達に明久は、

「まずはみんな、お疲れ様。みんなの協力のお陰で、作戦も《最終^{ラスト}段階^{ステージ}》にまで来れたよ」

と、労いの言葉をかけてから、

「文^{あや}、おいで」

「うんなのだ」

明久に呼ばれ、とてとてと歩み出る装備科^{アムド}の《平賀文》。

体格から判断すると、どう見てもショートカットのよく似合う無邪気な小学生。

しかも低く中学年なのだが、これでも立派な武偵高校の生徒だ。

そして、文はそうするのが当然のようにチョコンと明久の膝の上に座った。

アリアは目を丸くし、レキは平然と流して（勿論、明久と文の関係を熟知している）いるようだ。

「文、アンナマリー号の現在位置は？」

文は考える時のクセ：明久からもらった（はめられた）”首輪”：本当にペット用のそれに下がる、”文”と一文字刻まれたドッグタグを指でいじりながら…

「あと7分で”ポイント・ゼロ”：【浦賀沖海難事故】発生現場につくのだっ
」

「いい娘だ」

と、文の小さな頭を撫でる明久。
すると文は撥ったそうな、でも心から嬉しそうな顔をして、短いスカートをたくし上げ、とあるアニメのキャラクターがプリントされた女兒用の下着の中に指を這わせ、恥ずかしげもなく脚を広げ愛撫し始める。

それは文にとって当たり前過ぎる行為だ。

身も心も全ての穴も明久に捧げつくし、武偵高校に来る前：《とある組織》にいた頃から、望んで【明久の性玩具】として生きてきた平賀文にとっては日常の一コマに過ぎない。

体液で透けたガキぱんつから、”突起”を始め幼い泌部に無理矢理

詰め込めように入れられた五つのピアスが露^{あいつ}になり、瞳から光と理性と知性^{しせい}が消え去り、濁った光は自分がただの【墮落した牝】である事を主張していた。

明久はただ喘ぎ声しか出さなくなった口に”いつも通り”に文の肢体に見合った小さな口にボール・ギャグをねじこみ噛ませる。

別にプレイじゃない。

ミーティングの邪魔だから、物理的黙らせただけだ。

確かに数限り無い快楽でよがり潰された【発狂モード】の文に言葉は通じないので、これはこれで合理的判断なのだろう。

初めてその光景を見たアリアはともかく、レキをはじめとする面々の反応は薄い。

まあ、それもその筈で【幼い体つきに似合わない全身ピアスと卑猥な刺青だらけの文が、ひん剥かれて縄で亀の甲羅チツクに縛られてベランダとかに吊るされてる姿】なんてのは類似光景まで含めてよく目撃されてる訳で、この程度の恥態など今更驚くに当たらない…というか、雄二ならともかく、今や【教員まで含めた武偵高校有数の超危険人物】と目されてる明久相手に、この程度で一々驚いていたら身が持たない。

良くも悪くも、武偵高校の生徒は順応性が高いのが特徴だった。

まあ、一部股間に血液を集中させたり、下着に体液を染み込ませてる生徒もいるようだが…

そして、明久は自分の前後の穴をなぶり悦楽に溺れる文を床に転がし、

「理子ちゃん、愛子ちゃんにいつまでもガンくれてないで…」例の物”は出来てるかな？」

実は理子、ミーティングが始まった時から、ちゃっかり自分と反対側の康太の隣に腰掛けた工藤愛子を、ずっと視線で牽制していた。

勿論、康太の片腕に抱つきながら…というか、乳の谷間に挟むようにしてだ。

実を言えば、どうやら【この世界】の峰理子…原作よりもかなり嫉妬深いらしい。

勿論、康太限定ではあるのだが…ともかく、

『こーたんに近付く発情期の匂いをプンプンさせて雌猫は、みんなまとめてりっこりこしてやんよっ！…！』

というノリなのだ。

このノリ、誰かに似てると思ったら…そう、今もべったりとキンジ

の腕に、奇しくも理子と同じスタイル（乳挟み）で抱き付いてる《星伽白雪》だ（汗）

原作と同じく、この時点だとまだ面識は薄そうだが…

きつと【この世界】の理子と白雪は、お互いをよく知れば親友どころか”盟友”になれるかもしれない。

何より男の趣味は被らないし（苦笑）

さて、その理子は明久の前に出ると、

「出来てはいるけど…」

と、手渡したのは何の変哲もないUSBメモリーだった。

「最後にもう一度聞く…分かってると思うが、」

理子は明久だけに見えるよう、普段のおバカの仮面を捨て去った顔で、

「”これ”を使えば、確実に血が流れ、死人が出るよ?。」

しかし、明久は事も無げに…

「別に僕が殺す訳でも、殺人強要ないし教唆する訳でもない。問題ないよ」

と言うと微かに笑い、

「ただ、ちょっとだけ引金を引くだけだよ」

理子はその笑顔…邪気の無い無垢な笑顔だからこそ、背筋ゾクリッと冷たい感触が駆け抜ける。

そして、

（アーくんはやっぱり、武偵より”イ・ウー”向きの人材だよ…）

と、心の中で付け加えた…

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

クリスマスだつてのに病院から出れない鬱憤を執筆エネルギーに変換してる暮灘です(^^);

さてさて【Episode00】もいよいよラスト・スパート、皆様如何だったでしょうか?(^^);

明久が立案した”作戦”…

そのエゲツなさが描けてたらなあと(^^);

そして、いよいよ出てきた作者一押しキャラの《工藤愛子》

実は雷撃系の能力者…つまりは【超偵】で、その实力は後書きを読んでもくださる皆様限定に公開しますと…

【その威力の割には、極端に戦闘時間が極端に長く、また多彩な応用が効く器用さを併せ持つ】

なんて手放しベタ誉めの評価があったりします(^ー^;))

もし、愛子がS研にいれば確実に【S級武偵】だったでしょうね。

ちなみに某吸血鬼が絡むエピソードでは、康太ノ理子ノ愛子の活躍の可能性が跳ね上がります(o^_^')b

さて、【E p i s o d e 0 0】もいよいよ次回、長くても次々回でラストなんですが、少々懸念というか心配材料が…

え〜と、読者の皆様から頂く感想が、前回ついに一件になってしまい、正規連載前に読者様に厭きられたかな〜と（^―^;）

正直、正規連載にすべきかどうか、迷いが出てきました。

とりあえず、【E p i s o d e 0 0】はラストまで書く予定ですの
で、もう少しだけお付き合いいただけたら幸いです（o^_^）b

【バカとトリッパーとガンダム種】Episode 00 第1話?へスランプで

皆様、こんにちわー

最近、入院環境のせいで執筆モチベーションが下がりになり、《何を書いてもしっくりこない病（軽度のスランプ）》にかかってしまった暮灘です（泣）

いや、これを放置すると今度は本当に何も書けないスランプになりかねないので、取り敢えず何か書いてみようと思っていた所だったのですが…

病院に隣接してるコンビニの中に、たまたまガンダム種のMS本（よくコンビニに置いてある1コインとかで買える奴）が置いてあるのが目に入り、つい買っちゃったんですね（^^；

それを読んでるうちに生まれたのが、このエピソードって訳です。つまり、

バカテス・メンバー

（転生in）

ガンダムSEED世界

って感じです。

作者の記憶が曖昧な部分も有るので、果たしてどこまで《世界観》を文章化できてるか自信はありませんが、ただ一つハッキリ言えるのは…

【決して真面目な《ガンダムSEED》ファンの方は読まないで下さいm(_____)m】

キラとアスランが、しょっぱなから変です(爆!)

多分、他のキャラも種&バカテスに関わらず相当に変(と魔改造)になっております(;^へ^A

取り敢えず、こないいつも以上にデタラメなエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです(o^_^)(b

追伸

《後書き》に、【もし、この作品を連載するとしたら?】についての簡単なアンケートを用意させて頂きました。もし、ご回答願えたら幸いです(_____)

それは、”物語”が始まる数年前…

『アスラン、またいつか会おうね…』

『ああ。キラ、それまで元気にいるんだぞ?』

『うん、アスラン』

『トリイ』

『ところでアスラン…お別れ前に伝えたい事があるんだけど』

『いや、お前の言いたい事ぐらい、言わなくたって分かるさ』

そして、二人の少年は同じ方向…正確には、同じ人物を見ると、

『取り敢えず、アキヒサは【ボクの（俺の）嫁】だから』

『どうしてそこで僕に振るのさっ!?!?』

”メキツ！！”

その時…

僕が最後に見た光景は、笑顔で互いの顔面にクロスカウンター気味にクリーン・ヒットさせたキラとアスランの拳だった…

CE71年1月24日

中立国オーブ所有コロニー《ヘリオポリス》内、某地球連合軍事施設

「うわあああーっ！！？ 僕の”後ろの穴”は、僕だけのものだあーっ！！」

僕は布団を蹴飛ばすと同時に跳ね起き、同時に枕の下に隠してある黒と銀、2丁の軍用拳銃（45口径）を左右の手で同時に引き抜くっ！！

勿論1丁はキラ用、もう1丁はアスラン用だ。

（勿論、こんなオモチャで仕留められるとは思わないけど…）

でも、何もしないで掘られるぐらいなら、せめて死にもの狂いで抵抗してやるっ！！

「第一、僕は掘られるより掘る方が好きなんだっ！！」

大体、僕が好きなのは女の子と男の娘であって、断じて少年愛は範疇外だっ！！

なんて考えてると、隣のベッドから誰かがむくりと起き上がる気配がして…

「いきなり明け方に飛び起き、堂々の助平宣言とは…相変わらず”明久”は剛毅じゃの〜」

と、容姿を裏切らない可愛い声

そのデカイ言葉さえも、チャームポイントにしてしまうプリティ・パーソン

そう、隣に寝ていたのは僕と同じくオーブの公営企業《モルゲンレ―テ社》から出向してる美少女…もとい。美男の娘パイロット、【木下秀吉】なのさっ

もし、この時点で僕や秀吉の違和感に気付いた人がいたとしたら、
凄いと思う。

そう、【この世界（C E：センチュリー・エラ）】の流儀に従うな
ら、僕は…

【アキヒサ・ヨシイ】

の筈で秀吉は、

【ヒデヨシ・キノシタ】

の筈だから。

でも、僕は秀吉を秀吉って呼ぶし、秀吉は僕を明久って呼ぶ…

勘が鋭い人なら、もう気付いたんじゃないかな？

そう、僕と秀吉はいわゆる【トランプパー転生者】なんだよ。

”前世（？）”で僕が覚えてる最後の記憶は…

（確か、姫路さんの…）

【必殺ミートローフ】を食べたところまでだと思う。

転生のショックか、はたまたミートローフを食べたショックか判らないけど、記憶がところどころ飛んでたり曖昧だったりするけど、

（多分、あれが原因だよね…？）

まさか本当に、姫路さんの料理が”殺傷力”を持つ日が来るとは思わなかったけど…

あつ、そういえば秀吉も転生者なんだけど、厳密に言えば…

僕がいた世界とよく似た

《極めて近い別の世界》

からの転生らしいんだ。

はつきり覚えてる記憶でも細かい部分が食い違っし、

（それに何より…）

《秀吉の死因（？）》が【必殺ミートパイ】という事実が、決定打だったんだよ。

普通、自分を殺した【猛毒料理】を間違う人はいないでしょ？

（でも、秀吉に会えたのは、本当に…本当に幸運だった…）

この世界に転生したと自覚した時、僕は神様なんていないことを自覚した…

じゃなければ、きっとここは”地獄”って呼ばれる場所に間違いないんだよっ！！

まず、僕は本来は秀吉と同じでプラント生まれのコーディネーターだ。

これ自体には問題はないと思う。

というか、《ピンクのふわふわ髪に対する服従因子》とかは入っていないと思うし…入ってないよね？（汗）

それはともかく…

【“前世”では姉だった人が実の母だった】

もう、この時点で色々アウト&ダウト（嘘）だっ！…！

姉さんだった筈の母さんは、生まれたての僕を見るなり…

【僕がお嬢に逝けなくなるような凄いチュウ】

をしたらしい（泣）

なんか、その時点で僕の苦難に満ちた人生は決まったようなものだ…

何せ姉さん…いや、母さんは何を思ったか、物心つく前の…転生前の記憶が蘇る前の僕を、

【女の子として育てた】

んだから…

実際、僕は幼稚園の頃は自分が女の子だと思ってたぐらいさっ…！

（涙）

（そして、そのプラントの某幼稚園の頃…）

僕は…僕は…

（キラとアスランに出会い）

『アキヒサはボクのお嫁さんだから』

『アキヒサは俺の嫁だから』

強引なキスと一緒に”告白”されたんだ…

幼稚園から幼年学校にかけては、そりゃあ凄かったんだ。

何がって、僕がいなければ親友同士…というか、腐女子好みの関係

にしか見えないキラとアスランが、僕が絡んだ途端、

（笑顔で《肉体言語》の応酬だったもんね…）

あの頃、僕は改めて戦闘に特化（？）したコーディネーターの恐ろしさをまざまざと見せ付けられた気がする…

（もしかすると、僕の転生前の記憶が戻ったのって、あの二人の
陰…とか？）

笑顔でアスランの顎を砕くキラとか、笑顔でキラの腕をヘシ折るアスランとか…

今思い出してもトラウマ物だと思う。

うん、それこそショック療法には十分になりそうなぐらい。

（でも…次の休み時間には、何事もなかったかのように治ってたよ
うな…？）

あの《ギャグ補正》めいた異常な治癒能力の高さは、最早コーディネーター云々とは無関係な気がするよ（汗）

幼年学校：元の世界で言う小学校の頃に《前世の記憶》を徐々に取り戻した僕は、家では姉さんのような母さんと、学校ではキラとアスランの猛烈なアタックから逃げ回る日々だったんだ…

（お陰で身体能力と危機に対する予知&回避能力は極端に上がったけど…）

いや、だから？と言われても困るけどさ。

とにかく、冒頭に出てきた”悪夢”が現実になって、プラントに残ってもオーブに行ってもカドが立つ…正確には、一緒にいる方のアタックが激化して、そして一緒にいない片方の逆恨みを買ってしまうから、僕は父さんのコネでモルゲンレーテに売り込み、無事にこうして極秘裏に開発してる連合&オーブ（オムニ&モルゲンレーテ）初の《MS》テストパイロットに選ばれたって訳なんだ。

だけど本当に驚いたのは秀吉なんだよっ！！

実は秀吉、とんでもない【武勇伝】の持ち主だったんだ

『当時、ワシはモルゲンレーテから《エンデュミオン・クレーター》に出向しててのう…そこで、所謂【グルマルディ戦役】に巻き込まれたのぢや』

なんと！ 秀吉は、《エンデュミオンの鷹》こと【ムウ・ラ・フラガ】大尉と共に、《最新の地獄絵図》と称される【グルマルディ戦役】を生き残った”ウルトラ・エース”だったんだっ…！！

だけど、公式戦闘記録に名前が出てこないのは…

『ワシは《民間技術開発スタッフ》名目で、エンデュミオンにおったからのお』

要約すると、秀吉はモルゲンレーテ・技術スタッフの一人（正確にはテストパイロット）としてエンデュミオンに出張してたらしいんだ。

そこで、グルマルディ戦役に巻き込まれて、ザフトから身を守る為にとりあえずMS（それとも、ストライカーパックだったかな？）に応用できる新操縦システム&OSを搭載した試作の【メビウス・ゼロ・カスタム】で出撃して…

『最後の方は、フラガ大尉と《ロッテ（2機編隊〃飛行分隊）》を組んで、戦っておったのぢやよ』

ちなみに、秀吉が【前世の記憶】に覚醒したのは、その一連の戦闘中だったらしいんだ。

（もしかして、記憶の覚醒って《身の危険》とかと関係してるのかな…？）

秀吉は文字通りの命の危機だったし、僕は人間の尊厳の危機だったし…

それはともかく、自分が残る事を条件に、先に非戦闘要員（モルゲンレーテスタッフ）を逃がすって《漢らしい判断》をした秀吉は、こうして戦い抜いてなお生き残った訳だけど…

「秀吉も、本来なら勲章を選びたい放題だったのにね」

「？ なんの話ぢや？」

「ゲルマルディ戦役の話だよ」

すると秀吉は苦笑しながら、

「《事実無根の為、お咎め無し》というのは、”青い秋桜”に犯されコーディネーター嫌いの巣窟になってしもうた連合にしては、十分に温情判断だと思うぞい？」

「そっかな？」

「そうぢやとも。考えてもみよ。当時のワシの身分は、あくまで【MAに乗れる民間人】に過ぎぬじゃぞ？」

秀吉は、まるで子供に諭すみたいに、

「軍籍持たずに武器を持ちて戦場に立つは、良くて民兵やゲリラ、悪ければ裁判不要のテロリストぢや。それこそザフトの捕虜にでもなれば、現場処刑になろうと文句は言えぬわ」

そういうもんかな？

ザフトもプラントが国家として承認されてない以上、かなり武装集団としては”ブラック”だと思うんだけど？

「民間人が戦場に立つのが御法度ごほうどである以上、エンデュミオンの生き残り…英雄は、フラガ大尉一人でいいのぢやよ」

勿体無いなあ…

だって秀吉のジンの撃墜数って、エンデュミオンのお鷹さんより1機多いんだよ？

（しかも、シグーを2機も落としてるし…）

クルーゼ隊長のそれじゃあないみたいだけどね。
でも秀吉に言わせれば、

『フラガ大尉がクルーゼ殿の相手をしてくれたのだから、ワシは他の雑魚シグーを落とせたに過ぎぬわ』

だってさ。

隊長機に乗ってる以上、雑魚とは呼べないと思うけど、多分秀吉にとっては、その程度の相手だったんだろう。

そして、秀吉はニヤツと笑うと、

「それにモルゲンレーテからは内々に相応の報奨が出ておるし、まあ…ワシも英雄呼ばわりはガラぢやないのにな」

なるほど…

（利害の一致…かな？）

連合にしてみれば、開戦以来の大敗を誤魔化したいから、英雄伝説

は必要。

でも、連合に巢食うブルーコスモスにしてみれば、

（英雄伝説に民間人…ましてや、コーディネーターのガキは邪魔なだけって事か…）

それは秀吉だって同じ事で、こんな状況下で名前を出したくはないだろう。

（下手に名前を出すと、連合に強制参加させられそうだし…）

ならこの場合、一番考えられるのは…

（上の方でなんか政治的な取引でもあったみたいだね…）

どんな取引にだったのかまでは判らないけど、《GAT-X計画》が連合とモルゲンレーテの公然の秘密、本格的な大規模共同開発になったり…

あるいは、

（僕と秀吉の《アストレイ》肆号機と伍号機が、連合の大幅な技術提供を受けて、急遽建造されたりしたのは…）

きつと無関係じゃないと思うんだ。

でも、この時の僕は何も知らなかったんだよ。

僕のテストしてた

アストレイ肆号機

「ギブソン・フレーム」

と、秀吉がテストしてた

アストレイ伍号機

「フェンダー・フレーム」

別名【アドバンスド・アストレイ】って呼ばれるたった2機のMS
が、この先の【あった筈の未来】を大きく変える事になるなんてさ…

次回^{ウン}予告

突然、ザフトに襲撃されるヘリオポリス！

平和だった街は、一気に戦場になるっ！！

阿鼻叫喚の地獄の中、押し寄せる強力なザフトMS部隊と強奪された”3機”の《G兵器》に対抗できる手段はあるのかっ！？

明久と秀吉は、果たしてヘリオポリスの危機を救えるのかっ！？

そして、明久を待ち受ける懐かしくも残酷な再会とは…？

全ての闇を切り裂け！
アストレイ！！

【バカとトリッパーとガンダム種】 Episode 00 第1話?へスランプで

皆様、ご愛読ありがとうございますm(_____)m

取り敢えず、明久&秀吉inヘリオポリスは如何だったでしょう?
(^^; ;

作者としては何気に勇者の秀吉とか、実はオカンだった玲さんとか
がお気に入り(笑)

そして、明久と秀吉の初期装備になる、原作ではまだ完成してなかった筈のアストレイ肆&伍号機《アドバンスド・アストレイ(ギブソン&フェンダー)》《も思い切りカスタムしてあるので、楽しみにして頂ければなぁ》と(^ー^; ;)

さてさて、前書きに書いたアンケートなのですが、連載する予定は立ててないのですが、もし連載をご所望の読者様がいるとすると、果たしてどんな需要が有るのか聞いてみたくなりまして(^^; ;
そこで、

【”バカ種” ヒロイン候補アンケート】

をとってみようかと（；^|^A

候補（1）

ラクス・クライン

ピンクのふわふわ髪がバカテスのヒロインと被るド本命（笑）

確かに話は盛り上がるけど、行き着く先は更なるカオスな時代？（汗）

候補（2）

姫路瑞希

彼女がヒロインの場合はラクスと【存在の入れ替え】が発生すると思います。

というか、【えっらいぼわわしたクライン家のお嬢】というイメージ？

候補（3）

木下秀吉

ある意味、本命（笑）

というか恋愛感情込みの名コンビとして活躍しそう（^^；

すると、物語は秀ちゃん（オーブ）&キラ（連合？）&アスラン（ザフト）の強烈な明久争奪戦という展開に…

候補（4）

カガリ・ユラ・アスハ

かなりの変化球（^|^；）

とはいえ、明久は一応モルゲンレーテのテストパイロットなので、接点は作りやすそう。

実はストーリー的にも一番、原作より変化するのは彼女をヒロインにした場合かもしれない（；^|^A

候補（５）

島田美波 or 葉月

まだストーリーは考えて無いけど、なんかこの二人はザフトっぽい
気がする（^^；

連合だったら、ホーク姉妹のライバル姉妹？

候補（６）

フレイとステラを除くその他のヒロイン

いや、二人を除いたのは、せめて【バカ種】でぐらい生き残らせて
あげたいもので（^ー^；）

以上の候補（１）～（６）までのヒロイン候補の内、誰があるいは
どのストーリーが好みか、お聞かせ願えると幸いです（――）

【バカとトリッパーとガンダム種】Episode 00 第2話?へアスランと

皆様、こんにちはー

またしても【バカテス×ガンダムSEED】ネタを書いてる暮灘です(^^; ;

いや、なんか文章として形になるのが現在はこの【バカ種】だけというのが、何とも微妙な気分です(;^| ^A

さて、今回のエピソードは…

サブタイ通りに

アスラン(＋クルーゼ隊) キラ 明久的な感じでストーリーが流れていきます。

ちなみにアスランとキラは、キャラ崩壊なんてレベルじゃありません(^^; ;

キラもアスランも、変な方向性で魔改造(笑)されてるし、なんかこの時点で、色々なフラグをヘシ折ってるような…?

強いて言えるなら、とある人物の死亡フラグは、綺麗さっぱりなくなっているようですが(笑)

取り敢えず、【こんな三人が活躍します】的なエピソードですが、

お楽しみいただけたら幸いです（o^_^）b

CE71年1月25日未明

ヘリオポリス某所、ザフト特殊工作部隊（クルーゼ隊）

「なんだか懐かしい匂いがする…この甘くて芳醇な匂いは、何時か何処かで嗅いだような…何処だ？」

ヘリオポリスに潜入した途端、何やら妙な事を言い出す《アスラン・ザラ》である。

この電波系の隊長代理、またまた妙な事を言い出したなあ〜と思う《オロール・クーデンベルグ》に《ラスティ・マッケンジー》、《ミゲル・アイマン》の【トリオ・ザ・死亡フラグ】の三人だったが、下手な事を言つてアスラン得意のコミュニケーション術、「肉体言語」を喰らうのは嫌なので黙っている事にしたようだ。

全く賢明な判断である。

「貴様っ！ クルーゼ隊長から現場指揮を任されておきながら、その軟弱極まりない言動は…グボアアッ!？」

とつい先ほど懲りない発言した《イザーク・ジュール》が、アスランが対キラ用に編み出し、同時に十八番おはこでもある

【ポケットから手を抜くのではなく手からポケットを抜く、居合と鞭打の技術を応用して完成させたコーディネーターでもまともに見えないくらい速くて重くて鋭い拳打】

のボディブロー一発で腹筋を打ち抜かれ、悶絶しながら攔座したのを目の当たりにしてるのだから、彼らの賢明っぷりが分かるというものだ。

ちなみにアスラン、この《居合鞭拳》いあいべんけんだけで、入学から卒業までザフト士官学校の格闘技トップであり続けた。

というか、キラ用に開発した拳を（手加減はしてるのだろうか…）同僚に平然とぶっぱなす辺り、アスランも中々に鬼である（汗）

” ツッコミは、常に全力全壊っ！！ ”

というのが管理局の白い悪魔… もとい。アスランが幼き日より心に決めたルールだった。

じゃなければ、あの” スーパー幼馴染み ” に満足なダメージなど与えられなかったのだから。

というか、チタン合金製パイプで背後から脳天に” お話 ” しても、

頭は無傷でパイプの方が曲がった幼馴染みに、

【本当に人間なのか？ 実は中身、サイバーダイン社製の戦闘用サイボーグじゃないのか？】

とアスランは疑問を持っていたりする。
ちなみにその時のキラの台詞は、

『硬気功や内勁を修めたボクに、鉄パイプや金属バットなんて通用する訳ないじゃないか』

「お前はどこの”男塾”だっ！？」とツツコんだアスランに罪は無いだろう。

そして、アスランは遠い目で語るのだった…

『居合鞭拳を完成させても、まだ一撃でキラの分厚い面の皮を打ち抜く威力には届かない…いつそ音速を目指すか？』

キラ・ヤマトにアスラン・ザラ…

鍛え方や戦う方向性を間違えてるような気がしなくてもないが、いずれにせよ色んな意味で恐ろしい二人なのは違いない。

少なくとも、原作よりはアスランが粘ってくれる事だろうと作者は期待していたりするのだった。

ちなみにこの程度の騒ぎはいつもの事なので、クルーゼ隊の誰も特に心配はしていない。

というかザフトの赤服たるもの、内臓の一つや二つが破裂したところで作戦や戦闘を中断する理由にはならない。

戦闘を継続しながら自己治癒や回復もできなくて、何がザフト！
何がコーディネーターっ！！

我々は、墮弱なナチュラルどもとは違う、選りすぐり精兵なのだよっ！！

MSが無ければ銃を撃てっ！！

銃が無ければナイフを抜けっ！！

ナイフが無ければ素手で殺せっ！！

手足を落とされても喉笛を食い千切れっ！！

それが我らザフトのあるべき姿っ！！

以上、ザフト赤服必読戦場マニュアル

パトリック・ザラ著

【戦場の心得：ザフト魂、ここにありっ！！】

より抜粋。一部改編

それでも、唯一の例外はいるにはいるのだが…

そう、一見すると心配そうに介抱してるが、獲物を狙う獣の如き瞳が色々と台無しにしてる『シホ・ハーネンフース』だ。

ちなみにシホ、これまでアスランにKOされたイザークを何度もお持ち帰りしてる実績がある。

「この部隊って、一々やることが過激だよねえ…特にザラ隊長が（汗）」

と、一連の騒動を見てリアクションに困った時の苦笑を浮かべる男の娘のような少女のような人物に、

「詳しくは知らねーけどさ…何でもアスランの通ってた幼年学校じゃあ、拳銃は打撃武器もしくはツツコミ道具代わりだったらしいぜ？」

と、肌を白くして髪を赤くしたらバカテスの某キャラとビジュアルが被る、この面子の中じゃあ常識人で、だからこそ貧乏クジを引きがちな《ディアッカ・エルスマン》だ。

ちなみにアンチの人々には「痔悪化・エロスマン（もしくはエキスマン）」等と言われてるようだが、少なくともこの作品の中では痔が悪化するような趣味&性癖は、今のところ無いと断言しておく。

「…それって、どこの武偵高校かな？」

「慣れるとは言わねえが、少なくともアスランはそういうもんだと思ってた方が良いいぜ？」 新入り”よお”

というディアッカの台詞に…

「ちょっとちょっと。いい加減、”新入り”は止めてよねっ！ボクにはちゃあゝんと、」

”緑の短い髪の少女”は、如何にも心外と言いたげに腰に手をあて、「《アイコ・ニコール・アマルフィ》って立派で可愛い名前があるんだからねっ！！」

アイコ・ニコール・アマルフィ…

蛇足ながらニコールは男性名だが、ニコールは【ニコール・キッドマン】という有名なハリウッド女優がいることから分かる通り、立派に女性名として通用する。

何となくTSキャラ臭くもあるが…果たして彼女の正体は？

同時刻

ヘリオポリス内、某工業カレッジ、空き教室…

「ぎひっ…ひぎっ…くひゅ…」

その少女は、まだ幼さの残る肢体に赤いエナメルボンテージ…
体的には隠さないと^{あらわ}ならない部分が露になっているボディスーツ・

タイプを着せられていた。

色が赤なのは、もしかしたら長く少しくせつ毛の彼女の髪の色に合わせたのかもしれない。

ガバツと開いた背中にはまだ完全に消えぬ生々しい鞭の裂傷痕や、蠟燭の火傷痕が残っている。

更には、まだ生えそろっていない…否。体毛が生え揃う前に永久脱毛処理された脚の間には、

【Fuck in Heavens Gate】

タトゥー（刺青）が入れられ、加えて最も敏感な”豆”と称される部分や”入口”は、幾つものボディピアスで飾られていた。

そして、《少年》はこのある意味【全身が痕だらけの少女】を、
普通とは少々異なる意味”で溺愛していた。

「《フレイ》…いくよ？」

《キラ》、膨らみきつてない胸の尖端…まだ小さなそこに無理矢理入れた大きなリングピアスに指をかけ…

”ぐいつ！”

一気にそれを引っ張り、

”ずんっ！”

自らの”アグニ”を杭でも胎内に打ち込むかのような勢いで、フレイの奥底に叩きつけたっ！！

「ぴぎいいーっ！！」

全身に走る激痛とミックスされる事で更に増幅された快感が、背筋からフレイの全身に駆け上がり、まだ幼い肢体を既に何度も何度も刻まれた【女としての絶頂】に導く…

大きく長い啼泣の後、フレイの瞳は大量の涙を溢れさすと同時に白目を剥き、口からは涎を垂れ流し、全身は小刻みに痙攣し、また筋肉が弛緩したせいで、

”ぶしゃああああ…”

と、アンモニア臭い黄金水を放出させる。

「気持ち良かったよ、フレイ」

キラがアグニをズルッとフレイのクレパスから引き抜くと…

”ゴポッ”

栓を外されせいで、フレイの体液とキラの白濁汁の混合液が、”豆”の部分を含めれば7つのリングピアスで飾られたそこから流れ出た。

「可愛いフレイ…ボクのフレイ…」

でも、現在はどうかやら【バーサーカー（ベルセルク）・モード】を発動してるらしいキラは、まだ満足していないようだ。

まだ失神しているフレイの髪をグイッと掴み、

「今度はコツチを使わせて貰うよ？」

と、前歯の無い…いや、キラへの”ご奉仕”の為だけに前歯が《抜かれた》小さな口へアグニをねじこむ。

すると、どうだろう！

フレイはまだ意識が戻ったないのにも関わらず、フレイは一つピアスを打たれた舌を巧みに動かし始めたではないかっ！！

「可愛いよフレイ…ボクの大事な【性玩具】…」
オモチャ

そう、今の《フレイ・アルスター》という少女…いや、「元少女だった者」といふべきか？は、こういう存在だった。

キラに無理矢理”女”にされた時に芽生えた感情…

それは《サイ・アーガイル》と交際していた時には決して味わえない、引き摺り落とされ頭を踏みにじられ顔から泥に沈められるような絶望じみた感覚…

それは、フレイにとって紛れもない

【悦楽】

だった。

それを理性で押さえつけるには、フレイは余りに若すぎ、またキラは執拗過ぎた。

フレイは薬物に依存するようになり快楽に溺れ、少女から女に、そしてキラ専用の性玩具にまで墮落するのは、あつという間だった。

そしてフレイが堕ちれば堕ちる程、キラはおそらく普通と違う意味で”愛し”た。

この二人の関係を語るには、まだまだ頁が足りない。

しかし…

はつきりと言えるのは、キラの【ピンクの髪フラグ】とフレイの【死亡フラグ】が、ブレイク・アウトされたこと…

そして、フレイとキラは間違いなく”幸せ”だと言うことだ。

だって…

フレイは失神しながら失禁する程の快感に浸り…

ボロ雑巾のように肢体を扱われながら、それでも壮絶な笑顔を浮かべてるのだから…

ほぼ同時刻

ヘリオポリス内、オーブ隠蔽軍事施設、MS整備ハンガー

「秀吉…いつ見ても惚れ惚れするよ…」

「おヌシも相変わらず”数奇者”^{すきもの}ぢやのう」

「ホント、いつ見ても惚れ惚れするよ…僕達の《アドバンスド・アストレイ》」

ここでもエロシーンを期待された読者の皆様、すみません。
一応、お約束なので（笑）

それはさておき…

確かに【アドバンスド・アストレイ】は明久だろうとガトーだろうと満足するだろうMSだった。

そもそも、「原作」ではパーツ状態のまま、この時点では完成していない筈のアストレイ肆&伍号機（後のグリーン・フレーム&ミラージュ・フレーム）だったが、この世界では既にロール・アウトされていた。

しかも、先行して完成していたゴールドノレッドノブルー・フレームのアストレイ3機のデータを更に洗練させ、また既成概念に囚われない新基軸をいくつも組み込み完成させた…

と、表向きの資料には書いてあるのだが、実際には明久とグルマルディ戦役直後に合流した秀吉が連名で提出した

【アストレイ改造／改良仕様書】

通りの内容の機体だったのだ。

ただ、少し疑問だったのは…

「それにしても、よくぞこうまで短期間で完成したもんぢやな…資材が揃うのも早かったし…これではまるで、」

「まるで、誰かがアストレイの改造案を出すのを待ってたみたい？」

明久の言葉に秀吉は静かに頷き、

「いくらなんでもワシらに《都合が良すぎるタイミング》で、おヌシの【ギブソン・フレーム】もワシの【フェンダー・フレーム】も完成したからのう…まるで、”今日”の騒動に合わせるように」

しかし、明久は《チェリー・サンバースト（唯のギター太のカラー）》に塗られた【ギブソン・フレーム】と、《3トーン・サンバースト（澗のエリザベスのカラー）》に塗られた秀吉の【フェンダー・フレーム】をもう一度見ながら、

「僕のギブソン・フレームと秀吉のフェンダー・フレームは、塗装以外は基本的に同じ仕様だから、同時にロールアウトしてもおかしくないよ」

「それはそうぢゃが…」

明久は苦笑して、

「今はそれで十分だよ。カラクリはその内わかるだろうしね」

最初の爆発音が響いたのは、それから数分後の事だった…

次回予告^{ワン}

始まる襲撃！

肉が焦げる匂いに、銃弾が人に突き刺さる音が響く！

そんな地獄の中、アイコ・ニコール・アマルフィは、信じられない人物と再会する事になる…

闇より立ち上がれ！

ブリッツ・ガンダム！！

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

なんと続いてしまいました【バカ種】です(;^|^A

何故か今はこの物語だけは、ストーリーがまとまるんですよ。

さて、今回はアスラン キラ 明久というストーリーでしたが、如何だったでしょう?(^^;

我ながら無茶な改造をしたなあ〜とか思っております(笑)

しかも、ニコルがあの子っぽいし(笑)

そして、ブリッツのテストパイロットは…

次回投稿は未定ながら、いよいよバトル・ステージに移行…する
といいなあ〜と(^-^;))

ぶっちゃけ、クルーゼ隊(あと、魔乳さんとか…)が原作より苦勞
するのは目に見えてますが、次回も気長にお待ち戴けたら幸いです
(o^_^')b

追伸

ご意見&感想や、前回の後書きで募集した【ヒロイン候補】等々、
首を長くしてお待ちしております（――）

【バカとトリッパーとガンダム種】Episode 00 第3話?へいやいや、

皆様、こんにちはー

最近、どうもやることなすことシャッキリしない感じがする暮灘です(^^; ;

さてさて、今回の投稿もやっぱり【バカ種】だったりします(^^; ;
いや、人気無いみたいだけど書けるうちはめげずに書いてみようかと。

さてさて、このエピソードの主演はぶっちゃけ…

【アドバンスド・アストレイ】

です(爆!)

いや、どうせアホなノリの作品なら、徹底的に真面目に設定で遊んでみようかと思ひまして(;^ー^A

ガンダムSEEDのMS、特にアストレイ系に興味ない読者様には全く面白くないエピソードかもしれませんが、楽しんで頂ければ幸いです(o^_^')b

追伸

ラストにチラッとバカテスキャラ同士の対決が…

アストレイ肆号機

【ギブソンフレーム】

アストレイ伍号機

【フェンダーフレーム】

それまでのゴールド、レッド、ブルーと余りにスペックが異なる為に《アストレイ改型》と資料に記載される事も多いMSだが、どちらかと言えば…

【アドバンスド・アストレイ】

という呼び名の方が通りがいい。

そもそも、【アドバンスド・アストレイ】とは、どという経緯で開発されたのだろうか？

まずそれは、明久と秀吉が連名で提出した

【アストレイ改造／改良仕様書】

の話をせねばなるまい。

そもそも、明久も秀吉も元いた世界（転生前にいた世界）で、奇しくも【ガンダムSEED】ならびに【ガンダムSEED Destiny】という『アニメ作品』を過去に試聴していたのだった。

秀吉も子供の頃、かなり好みのアニメだったようだが、明久に至っては比較的新しいスパロボ系ゲームやMS格ゲーに数多く登場した為、気が付いたらSEED系のMS全般に詳しくなっていたのだ。

だからこそ、明久は現在ある3機のアストレイ（金／赤／青）が、改良を重ねて徐々に

【MSとして成長し、完成してゆく機体】

だと考えていた。

だが、明久はそんな悠長な事ができる余裕は無かった。

何しろ明久は【ユニウス崩壊】の事実を知っていた為、CE71年1月25日迄に何としても

【強奪されるG兵器と互角以上に戦えるMS】

を欲したのだ。

そう、明久とてCE世界で生きる中、【失いたくないもの】が増えすぎていたのだから…

明久は思う。

（僕がちゃんとしたアストレイを作らないと…）

「アサギやマユラやジュリが死ぬからなあ…」

そこで明久は、欠落や曖昧な部分は有るものの頭を振り絞り、

【CE71年当時で集められる最高の素材を用いて、最強のアストレイを組み合わせる】

計画を立てたのだった。

それはとても孤独な【兵器開発競争】という戦いだった。

アストレイのテストパイロットの一人を勤めながら、《アストレイの欠点を洗い出し、その改善点を列記するレポート》として【仕様

書】を纏めるのだから…

もし、明久が「ゲームしか脳のない」転生前”のおバカな明久】だったら、この作業は不可能だったろう。

しかし、先ずは土台…

転生前は姉だった筈の、この世界では母になっていた（ややこしいが…）《アキラ・ヨシイ》に与えられた【コーディネーター】という土台が良かった。

アキラ・ヨシイが《吉井玲》なのかは定かではないが…

少なくとも【CE世界での明久の母、アキラ・ヨシイ】は、自分の息子に自分の頭脳や才能が可能な限り遺伝するような【DNAコーディネート】を行なっていたのだ。

そして、キラやアスランから逃げ出したい一心で明久は機械工学を中心に勉強してその能力をひたすら伸ばし（物理的に逃げる為に身体能力や危機察知／回避能力はそれ以上に伸びたが…）、父のコネがあつたとはいえ就労年齢を半ば無視してモルゲンレーテに潜り込むという快挙を成し遂げたのだ。

そういう意味では、（動機はどうあれ）明久は才能のある努力家と

も言えるし、だからこそコツコツと計画を進める事ができたのだらう。

またそんな明久へのご褒美という訳では無いだろうが、「運命」はこの時は気まぐれに明久に味方したようだ。

【ヘリオポリス襲撃】まで残すところ半年となったCE70年7月4日…

グルマルディ戦役から帰ってきたばかりの【戦闘記録を闇に葬られたもう一人の英雄】…

”転生者”である《木下秀吉》とヘリオポリスにて、無事に合流を果たしたのだ。

襲撃まで残り半年…

直ぐに互いの事情を理解しあえた明久と秀吉は、明久が書いていた【仕様書】を叩き台に一気に形に仕上げた。

明久の転生前の記憶と現在の立場から得られた膨大な知識と、非公式ながらグルマルディ戦役でムウを上回る戦果をあげた秀吉の実戦経験：

この二つが組み合わさった時、相乗効果で爆発的に作業が進んだのだった。

余りに細かい部分は割愛するが、大雑把に書くと完成した

【アストレイ改造／改良仕様書】

の内容はこうなる。

(1) トランスフェイズ装甲（TP装甲）の採用

コックピットや主動力の周辺（以後、これを重要区画と略す）や高機動時における高負荷部位、並びにシールドに、アストレイに使われる発泡金属装甲の間にフェイズシフト装甲を挟みこむ【トランスフェイズ装甲（PS装甲）】を採用する事。

TP装甲は、PS装甲のように常時フェイズシフトするのではなく、大きな負荷や応力がかかった場合に瞬時にフェイズシフトさせる構造で、PS装甲に比べて大幅な省電力化が見込める。

また、シールドと表面装甲に関しては、耐ビーム処理であるラミネート装甲との併用（ツイン・メリット装甲）も検討されたし。

（２）パワー・エクステンダー型燃料電池への換装

軍需産業に囚われず、オーブの民間企業（社名や製品名は添付資料にて確認）が開発した「新型大容量燃料電池」を、軍用規格品として設計を依頼し、発注すること。

（３）ゴルドフレームと同じく連合【GAT-X規格】と同一規格の兵装を使えるようにする事

今更、オーブ独自規格のMS用兵器を開発するのは完全に時間と予算の無駄。

GAT-Xシリーズを共同開発してる以上、兵装や備品／消耗品等々はことごとく共通化した方が効率的。

将来的には、アタッチメントやオプションで、ザフトのMS用装備全般も使えるようにしたい。

（４）《ストライカーパック・システム》の搭載

小国であるオーブは、経済的＆人的資源を考慮すれば、連合やザフ

トに比べ保有できるMS数は大幅に制限される。

ならば、バックパックの換装で様々な戦術的要求に対応できる《ストライカーパック・システム》は、寧ろオーブにこそ最も必要とされる装備だろう。

また同時に腰部左右前後や腕部、膝部、脛部等のハードポイントの強度／機能強化も考慮されたし。

(5) パワー・セル式ビーム兵器ザスタバ・ステイグマの導入

ユーラシア連邦のアクタイオン社が開発しているビーム・マシンガン《ザスタバ・ステイグマ》は、MSの内蔵エネルギーに依存するのではなく、【パワーセル（コンデンサ・カートリッジ）】による“外部電源”で発射可能な唯一のビーム兵器である。

威力や射程はGAT-Xシリーズのビームライフルに劣るが極めて連射が利く上にMS本体のエネルギーを消費しない《ザスタバ・ステイグマ》はMS用兵装の一つの理想と言える。
ならば、アストレイに採用しない理由はない。

(6) 《肩部フレキシブル・スラスター》の追加

現在開発されてるソード・ストライカーやランチャー・ストライカーの肩部装備は、バックパックに比べるとさほど有用性は高いと言えず、また必要な将来的な発展改良でバックパックに一体化したり、あるいは腕部ハードポイントに装備移動できるような物ばかり

である。

ならば、各種改造や改良による重量増とそれに伴う機動力の低下を補う為に、両肩部に肩の動きとは無関係にスラスタを指向できる

【フレキシブル・ターレット・マウント方式の高機動スラスタ・ユニット】

の増設を提言したい。

スラスタ自体はエール・ストライカーの高機動スラスタを流用すれば、制作するのはフレキシブル・ターレットだけで済むので開発期間／経費の圧縮に繋がる筈。

(7) 疑似人格OS型サポート量子コンピュータの搭載

これら多様化する装備や将来的な発展性を確保する為、それを処理するコンピュータを搭載する必要がある。

候補機種は添付ファイルに記載。

これ以外にも、エール、ランチャー、ソードしかないストライカーパックを補完する為に新たなストライカーパックを追加発注する等細々としたとこまでフォローする、非常に緻密で完成度の高い【仕様書】ではあった。

もし、原作ファンの読者の皆様なら既にお気づきだろうか…

このカスタムは、【アストレイをバージョンアップさせつつも、ストライクとその派生型や発展型の要素を取り込む】ようにセッティングされていた。

実際、それまでのアストレイとは余りにも内容が異なる為、ペットネームは色を表すのではなく、明久の提言でC E世紀では【伝説のギターブランド】二社の名が関されたのだった。

だが、”第2話？”で秀吉が指摘してた通り、【仕様書】をモルゲンレーテ本社に提出してからの流れは、確かに少々不透明な部分がある。

グルマルディ戦役での《公表できない秀吉の活躍》が政治的な取引材料になった事は間違いないだろうが、それにしても連合との折衝から機材搬入までのタイミングが早すぎた。

更に不可解なのは、既に【仕様書】として提出した書類の各種装備は、既に予備研究がスタートしてたり購入の予備交渉が始まっていたものばかりだったのだ。

とは言え、第2話？のラストで明久が仄めかしていたが、しょせん明久と秀吉は現場のテストパイロットであり、複雑怪奇なモルゲンレーテや連合上層とのやり取りなど知る術が^{すべ}無い。
であるなら、

（自分の都合のいいように解釈するしか無いじゃないか）

少なくとも明久はそう割り切っていた。

誰かの…自分達と同じ【転生者^{トリッパー}】の手の平の上で踊らされてるのかもしれないけど…

（それでも自分や大事な人達が死ぬよりはマシだから…）

それが明久の結論だった。

そして、やがて床を伝い微かに響いてくる振動…

コロニーに地震等是有り得ないので、おそらくは爆発による振動だろう。

「…始まったようぢやな？」

と、小さく呟く秀吉に、

「そうだね。じゃあ僕と秀吉で……」

明久は自分のヘルメットを取り、

「ザフトのお嬢ちゃんお坊っちゃんの皆さんに……」

”ぱんっ！”

明久は左右の手を叩き合わせ、

「戦争のやり方を”教育”しようか」

さてその頃、連合の隠蔽軍事施設の中にあるMSハンガーでは…

「ぐはっ!？」

「ごほっ!？」

単純な身体能力なら、ナチュラルの平均値を遥かに上回るコーディネーターの特殊工作員…MSを強奪する為のクルーゼ隊のパイロットではなく、銃器や肉弾戦でハンガーを制圧する為のガチの白兵戦用特殊部隊のコーディネーター達が、為す術もなく、あるいは何が起こったか分からぬ内に喉仏を掻き斬られ倒れ伏していたのだ…

信じられ無いことに、それを行っていたのは、黒髪に左右の手に一振りずつ血を吸った小太刀を握る

【たった一人のナチュラルの少年】

だった。

「む、ムツツリーニ君…？」

その闇が人の姿をとったような漆黒のパイロットスーツを身に纏う小柄な少年を見つめるアイコ・ニコール・アマルフィは、信じられないとばかり大きく瞳を見開いた…

「久しいな…というべきか？」 工藤愛子”」

「なんで、ムツツリーニ君がこんなところに…」

「…今の俺は、連合のテストパイロットだ」

「えっ…？」

「…【G A T - X 2 0 7 ブリッツ・ガンダム】は俺の愛機。誰にも渡しはしない」

” チャキン…”

そう小太刀を二刀流で構えるムツツリー二に、アイコ・ニコール・アマルフィ…いや、愛子は天を仰いで、

「こんなのって、無いよね…でも、しょうがないつか」

と、隠し持っていたバトル・アックス戦斧を握る。

「それでも一応、ザフトの赤服だからね…」

愛子は間合いを図りながら、

「ボクだって手ぶらで帰る訳にはいかないんだよ」

「ならば、来い。刃で己を証明してみろ」

ムツツリー二は手をクイクイっと動かし愛子を誘う。

「上等 アイコ・ニコール・アマルフィ…」

「…コウタ・T・ムッツリーニ」

そして、二人の視線が真正面からぶつかり、

「推して参るっ！！」

次回予告^{ウン}

ヘリオポリス随所で交錯する銃弾と銃弾、刃と刃、拳と拳っ！！

さあ、反撃はここからだっ！！

今こそ撃て！

アドバンスト・アストレイ！！

【バカとトリッパーとガンダム種】Episode 00 第3話?へいやいや、

皆様、ご愛読ありがとうございますm(_____)m

いきなり【アドバンスド・アストレイ】の概要説明がメインだった今回は如何だったでしょう?(^^;)

それにしても、ガチでMSの設定を文章化するなんて、果たした何年ぶりでしょう(笑)

一応、【CE71年に実用化可能な技術を用いる】という縛りを入れて設定してみたつもりですが、取り敢えずこんな感じで(笑)

あとはどんな凶悪なストライカー・パックを用意してやろうかなあ
(と(ー))

今回はいよいよMS戦…に入れればいいなとか考えております。

今のところヘリオポリス脱出までのエピソードを書こうかなあ〜とか考えてます(^ー^;)

こんな感じのストーリーですが、またご贔屓頂ければ幸いです(。^ - ^) b

【バカとトリッパーとガンダム種】 Episode 00 第4話?へあれ??

皆様、こんばんわー

何か最近、色々と今まで以上にモチベーション維持に苦労してる暮
灘です(^^;) ;

さてさて、今回もまたまた【バカ種】です(^^|^^;) ;

第4話は基本的に視点が三者に移動するエピソードで、最初はキラ
とアスランの《vsイベント?》+マリユード、次は康太(連合)
ザフト
vs 愛子の決着…

そして、ラストはいよいよ出現する明久&秀吉っ!!

いや、実は作者的にはこの出撃シーンに大盛り上がりでした(; ^
| ^ A

いよいよヘリオポリスを巡る戦闘が始まりましたが、果たした明久
達の介入で歴史はどう変わっていくのか…?

その辺りを楽しんで頂ければ嬉しいッス(o^ - ^) b

交錯する拳と拳、蹴りと蹴り、頭突きと頭突き…

驚くべきは、お互い全力全壊で叩き付けあっているのに、傷つくどころか痛がつてる様子すらないキラとアスランの異常な頑丈さ、タフネスさだ。

きつとこの二人は、皮膚とか筋肉とか骨格がフェイズシフトとかしてるに違いない。

さて一方、キラvsアスランのリアルバウトが行われている中、本来のストライクを奪う係だったクルーゼ隊の一人で、【トリオ・ザ・死亡フラグ】の一角でもあるラスティ・マッケンジーは、今まさにストライク・ガンダムに取り付こうとしてたが、

”シュッ”

ストライクの装甲ハッチを強制解除した途端に待っていたのは…

「これも仕事よ。悪く思わないでね」

”タタンッ！ タタンッ！ タタンッ！”

と、2丁のポリマー・フレームタイプ軍用拳銃のダブル・タップ（素早く二度引金を引き二発を瞬時に発射する拳銃射撃術）3連射を

頭部（というか顔面）と心臓周辺に浴び…

”…ぐちゃ”

形容しちゃいけない感じの死体となってストライクから転落したのだった。

ラストより一足先にストライクのコックピットに陣取っていた人物…

えっらいグラマーな、少しくセのかかった長い茶髪が特徴のちよつと硝煙の匂いがする美人、魔乳…もとい。《マリュー・ラミアス》は、既にこの時代ではクラシカルになつてゐる軍用拳銃「ミサト（H & p ; k 社の USP）」と「ミレイユ（ワルサー社の P99）」を、脇の下と腰の後ろに吊るしたホルスターに収める。

相手が見かけと強さが一致しないザフトのコーディネーターとは言え、眉一つ動かさずに射殺できるあたり、マリューも中々のプロフェッショナルだ。

ちなみに、拳銃が微妙に中の人繋がりののはお約束だったりする。

「全くザフトの連中もせっかちなんだから！　せめてOS開発が終わるまで、待ちなさいってーのっ！！」

いや、それが完成してからじゃ手遅れだから、このタイミングで襲撃をかけてきたんだと思うぞ？
気持ちは判らないではないが。

（全く…私の本職は、艦隊戦術指揮と白兵戦だったのに…）

「何の因果でMSなの…よっ…！」

（動けえーっ！っ！）

…取り敢えず、どうやら此处では原作通りにストライクの防衛には成功したようだった。

一方、同時刻

GAT-X207【ブリッツ・ガンダム】のハンガー周辺では…

「…”縮地”」

”ビュンッ！！”

「速っ！？」

その時のムツリニのスピードは、明らかにナチュラル／コーデイナーを問わず、一部の例外除く人類の限界を超えていた。

そして、アイコ・ニコール・アマルフィ改め愛子が気付いた時には…

”ビリビリイッ！！”

ザフトの赤服が、下着ごと切り裂かれていたのだった。

「きゃあああーっ！！」

愛らしい悲鳴と共に、

”からんからん”

戦斧を落とし、コーデイナーなのに今度も膨らみきれなかった胸とか脚の間とかを隠しながら、

”ぺたり”

っと床に座りこんでしまう。

「ぼ、ボクが目で追えないなんて…ムッツリー二君、本当にナチュラルなのっ!？」

「…全ては修行の賜物」

そう静かに言い放つムッツリー二…

しかし、愛子にはもつと気になる事があった。

(ムッツリー二君…ボクを見る瞳が冷たいよお…)

「…あ、あのさ、鼻血とか流さないのかな？」

「…流す鼻血は、とうの昔に枯れ果てた」

『どんだけ凄まじい体験をしたんだムッツリー二っ!？』とツツコミたくなるところだが、そこはそれ、流石は”元”工藤愛子(現アイコ・ニコール・アマルフィ)、

「え〜と…普通は『流す涙は渴れ果てた』じゃないのかな？」

見事に切り口の違うツツコミだ。

だが、心では全く別の事を考えていた…

(そんな雌豚を見るような蔑んだ目で見られると、ボク…ボク…)

”じゅん…”

唐突にだけど…

愛子 side -

「フン…この状況で濡らすか？ お前、相当にMの変態らしいな？」

”ゾクゾクッ”

（嗚呼、いいっ…）

もつとだよ…

お願いだから、もっとボクを罵ってっ！！

ムツツリー二君、いつの間にこんなガチサドの芸風を身に付けたか
知らないけど…

（元々大好きな人なのに…）

その大好きな人にS責めされるなんて…

（ここ、なんて天国なんだろう…）

「四つん這いになり脚を開け」

ボクは言われるままの姿勢になる。

「二度と逆らえないよう躑てやる…先ずは、”後ろ”からだ」

ああ、もっと命令してえ…

二度と逆らう気が起きないように、ボクを激しく躑てよお…

(こんなムツツリー二君に会えるなんて…)

本当に転生できて良かったよお…

ムツツリー二君…？

違う。

違うよ！

こついう時は思いつ切り甘えた声で、

「はい　ボク、とっても嬉しいです《ご主人様》あ…」

ニコル・アマルフィ改めアイコ・ニコール・アマルフィ陥落。
亡命決定。

死亡フラグ、ブレイク・アウト

再びGAT-X105ストライク・ガンダム近辺

ラストイが蜂の巣になり落下してきて、ストライクが動き出した時は流石のアスランでも激しく驚いたが、だが悠長に驚いてる暇はない。

何となくだが、さつきから”死合”を繰り広げてる幼馴染みは、今を逃せば当分、倒すチャンスが無いような気がしたのだから…

しかし、キラと再び距離を開けて間合いの取り合いになった時、思わぬ邪魔が入った。

それは、ストライクの頭部に内蔵された75mm機関砲【イーゲルシュテルン】の射撃と、耳のレシーバーから入ってきた…

『アスラン！　いつまで油を売ってやがるっ！！』

「ハイネっ！？」

『…ミゲルだ』

作者注：この二人は中の人が同じくTMRです（笑）

「そうだったな。それでミゲル、どうかしたのか？ 可能ならば今の内に倒しておきたい”強敵”と交戦中だから、できれば後にして欲しいんだが」

『そんな悠長な事を言ってる場合かつ！？ さつさと撤退しろっ！』

「何故だ？ 我が軍は圧倒的な筈じゃないのか？」

『イレギュラー発生だっ！！ 【オーブ軍】を名乗る資料に無かったMSが2機も出てきやがって、逆にコッチが次々に食われてんだよっ！！！』

「なんだってっ！？」

ようやく事態の深刻さに気付いたアスランだったが、更にミゲルは追い討ちをかけるように、

『しかも、ブリッツを奪いに行った《斧使いの新入り》と連絡がつかねえんだ！！』

ミゲルが叫んだ途端、まるでタイミングを図るように…

『ザラたいひよお…ボク、ほりよになっひやら…ごめんね、ボク、亡命ひゆる…ひやぐうっ！！ おひり、きもちいいろぉ、もっろ

めちやくちやにしれえ…」

何だかアイコ・ニコール・アマルフィは、エリートとかザフトの赤服とか色々と終わったようだった。

「…萎え萎えだ」

アスランはそう呟くと閃光弾をキラに投げつけ、それでめくらまししてる間に撤退する。

キラも”強敵”^{とも}を無理に追いはしなかった。

イーゲルシュテルンの掃射で決闘に水を差されて、アスラン同様に興醒めしたというのもあるが…

「なにやってんだろ？」アレ”…？」

どうやら興味は、目の前で明らかに実戦で使えない【奇妙な動き（笑）】をする白いMSに移っていた。

そして、コンパクトに拘束してボール・ギャグを咬ませたフレイを詰め込んだバッグを肩に担ぐと、キラはストライクへと歩き出した。

時間を少し巻き戻す。

ヘリオポリス内、オーブ隠蔽軍事施設

明久 side -

「秀吉、【フェンダー・フレーム】は行けそう?。」

『コッチはシステム、オール・グリーンぢゃ。整備班は、ほんにいい仕事してくれるぞい』

それは良かった。

僕の【ギブソン・フレーム】も準備万端だ。

『おヌシこそ初の実戦ぢゃろ? 緊張はしておらんか?』

「全くしてないって言えば、嘘になるけど……」

僕は、口の端で小さく笑い…

「この緊張感、クセになりそうだよ」

『頼もしいのお〜』

別に無理はしてない。

上手くは言えないけど、なんかこう…

（ワクワクするだよね！）

そう、これはゲームじゃない。

コックピットに一発貰えば、サヨウナラの【殺し合い】だ。

それでも…

「ガンスリンガー1、アキヒサ・ヨシイ！ 【エールカスタム・ギブソン】、出るよっ！…！」

『ガンスリンガー2、ヒデヨシ・キノシタ！ 【プロトガンバレル・フェンダー】、出陣ちゃっ！…！』

オーブ整備班の声援と伝統の”帽振れ”を受け、僕と秀吉は戦場へと舞い上がったんだっ！！

僕の【ギブソン・フレーム】に装着してるストライカー・パックは、
《エールカスタム》ってタイプで、原作の《エール・ストライカー》
《に僕の意見で小改良を加えてもらった物なんだ。

簡単に言えば、4基ある高機動スラスターのマウント方式がユニバーサル・ターレット式に改造されていて、4基をそれぞれ別々の方向に動かせて、更なる変化自在の機動を可能としてるんだよ。

細かい点を挙げれば、中の推進剤を使いきれば切り離して軽量化できる《ドロップ・プロペラント（推進剤）タンク》が装着できるようになっていたり、上部2基のスラスターに《220mm6連装マイクロ・ミサイル・ポッド》が内蔵されてたりするんだけど…

（使い勝手はエールと同じだから…）

行ける筈っ！！

『明久、余り気負うでないぞ？　なに、”ジン”はさして強い相手

ではおらぬわ。特に対艦装備や対要塞装備のそれは、”座ったアヒル”のようなものぢやて』

と、軽い口調の秀吉。

（ありがとう、秀吉…）

初めての实战を迎える僕の緊張をほぐそうとしてくれるのがよくわかるよ…

「秀吉こそ、《ガンバレル・ストライカー》の調子はどう？ それ、まだ試作品でしょ？」

そう秀吉の【フェンダー・フレーム】が装着してる《プロトガンバレル・ストライカー》は、原作で《モーガン・シュバリエ》が使っていた【AQME-X04ガンバレル・ストライカー】の試作品って位置付けで、ガンバレルその物は、【メビウス・ゼロ】のそれをそのまま流用してるんだ。

ぶっちゃけてしまえば、【メビウス・ゼロ】のガンバレル・システムをただストライカーパックにしただけのような代物なんだけど…

『上々ぢやよ　むしろ下手に最新のシステムを組まれるより、コッチの方が扱い慣れてて好都合ぢやぞい』

秀吉が背中を守ってくれるって思うだけで、

（僕はどんな敵とだって戦えるんだっ！！）

「秀吉…」

『なんぢや?』

「大好きだよ」

『ば、バカ者っ！ 突然、戦前^{いくさ}に何を言い出すのぢやっ!?』

あれ?

何で僕、怒られてるんだろ?

「いつ死ぬか判らないから、生きてる内に伝えときたかったんだけど?」

『…明久は、いつもズルいのぢや』

「えっ?」

『安心せいっ！ 明久は何があろうとワシの目が黒い内は、決して死なさんぞいつ…!!』

次回予告^{ウソ}

戦場と化した人工の天空^{そら}を舞う二人の少年っ！！

最高のスペックに近いMSではあるが、所詮は2機に過ぎない…

果たした明久と秀吉は、押し寄せるザフトを防げるのかっ！？

崩壊を防ぐ為、放て！

ガンバレル！！

【バカとトリッパーとガンダム種】 Episode 00 第4話?へあれ??

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

前書きにも書きましたが、明久と秀吉の出撃シーンとマリユーの「悪く思わないでね」に大いに自己盛り上がりした暮灘です(^^; ;

他に実は珍しい点としては、康太と愛子のカップリングをまとも(?)に書いたのって初めてかも(^^; ;

実は【Sの康太】はかなりお気に入りです(笑)

そして、フレイを拘束(緊縛)して袋詰めにして持ち歩くキラ...に、気付かれましたか?(笑)

彼はまあ、そういう趣味みたいです(;^_^A

それにしても、我ながらザフトが受難な展開ですが、果たしたこの先どうなるのかは激しく不明ですが、またお付き合い頂ければ幸いです(o^_^o)b

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973y/>

吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた

2012年1月14日17時51分発行